公益財団法人 日本ハンドボール協会編　平成27年10月1日発行（毎月1回1日発行） 通巻554号

ハンドボール

特集
第6回 男子ユース世界選手権
第13回 女子ジュニアアジア選手権
第66回 全日本高等学校選手権大会
第28回 全国小学生ハンドボール大会

10


OCT. 2015 No.554





［表紙写真］第66回全日本高等学校選手権大会、男子優勝・藤代紫水の松岡寛尚選手（左）、女子優勝・高松商業の澤田のどか選手（右）

公益財団法人 日本ハンドボール協会
http://www.handball.or.jp/


ANA
ANA
ANA

普及指導本部の果たす役割



公益財団法人 日本ハンドボール協会常務理事　普及指導本部長　**三輪 一義**

これまで長年に渡り指導委員会委員として指導者育成活動に携わってきましたが、7月の改選により普及指導本部長という大任を引き継ぐことになりました。昨今の日本ハンドボール界の状況を踏まえれば、その重責に身が押しつぶされる思いですが、多くの方々の協力を頂きながら、1つずつ課題を解決していきたいと考えています。

1．課題を明確にすること

課題を解決するには課題を明確にすることが求められます。普及指導本部が抱える課題について「組織」と「事業」の点から整理する必要があると考えました。

（1）組織整理

普及指導本部が担うべき任務はとても広域にわたり、管轄する専門委員会だけでも12委員会にも及びます。この幅の広い普及指導分野の組織図を改めて整理することに着手しました。普及指導本部の両輪である普及部（山本繁委員長）と指導部（藤本元委員長）の元､その役割を明確にする目的で､普及部に〈小学生〉〈中学生〉〈学校体育〉〈マスターズ〉〈ビーチ〉〈車椅子〉〈キャリアサポート〉､指導部に〈指導者組織〉〈指導映像〉〈調査研究〉〈講習会企画〉〈NTS指導〉の専門委員会を置き、責任体制を明確にしました。これにつきましては指導委員会HPが立ち上がり次第見ていただく予定です。

（2）事業内容

組織整理による責任体制の明確化により、それぞれの専門委員会で果たすべき役割とその内容について、現状と課題をまとめる作業をしています。Routine化しているものも従来の踏襲に囚われずに、「ゼロベースで見直す」ことが出来ないか思慮検討中です。

2．具体的に、やれることから

一般理想論や机上空想論を唱えているだけでは何も動いていきません。また、物事は順序を超えて一足飛びに進んでいくと危うさを伴うこともあります。具体性を持つ取り組みが1つずつ目に見えてくることが必要です。普及指導本部が抱える具体的な課題について、この2ヶ月で取り組んだ事柄を明記します。

（1）Ｊクイックハンドボールの検証（小学生専門委員会）

竹内貞明委員長を中心として、今年度より実施されているＪクイックハンドボールのゲーム様相について、筑波大学大学院ハンドボール研究室の協力を得て、全国小学生大会ベスト8以上のゲーム分析を行い、ルール変更の検証作業を開始しています。このデータも公開予定です。現場の指導者の皆様とも議論を交わして､より良い方向性を探りたいと考えています。

（2）全国大会決勝試合を公認映像として公開（指導映像専門委員会）

市村志朗委員長を中心に、今後の小中学生の全国大会決勝を、公認映像として、YouTubeの日本協会指導委員会ページで公開していきます。全国のハンドボール愛好者全員で日本のU-15トップゲームを共有し、日本のレベルアップにつなげる目的です。既に8月の全国小学生大会男女決勝は公開しています。

（3）上級コーチ養成講習会における「指導構想」のバンク化（講習会企画専門委員会）

前号の機関誌No.553に掲載されていた「上級コーチ専門科目講習会報告」にもありましたように、日本のトップコーチによる「指導構想」を発表するカリキュラムを設定しました。その貴重な指導理論をデータバンク化して、日本中の指導者のレベルアップに貢献するために公開する予定です。

（4）日本ハンドボール学会とのコラボレーション（調査研究専門委員会）

吉村晃委員長を中心に、日本ハンドボール学会の會田宏理事長との協力によって、日本でハンドボールを文化として成り立たせるための様々な調査研究を進めていきます。前述のＪクイック検証もその1つに含まれます。強化にも関わる全国JOC大会における調査研究も具体的に計画されています。

3．指導者育成とハンドボール関連人口の拡充

「学ぶことを止めたら教えることを辞めなければならない」とは、フランス・サッカー代表監督の言葉として有名ですが、指導普及本部は今後、学ぶ機会を数多く設け、多くの指導者の皆さんに研鑽のチャンスを提供していきます。また、指導者資格として、指導年齢とは関係なく「（これだけは知っておいて欲しい最低限の基礎知識を身に付ける）Ｈ級資格（仮称）」や「（世界と闘える知識を身に付ける）Ｓ級資格（仮称）」など、日本ハンドボール協会独自の資格発行も視野に入れています。また、「ハンドボール用語統一」や「指導者養成テキスト」も解決すべき大きな課題です。

2020年を終えた後も、子ども達を含むハンドボール選手に、「夢」と「楽しさ」を与えることができる指導者の育成と、Playerだけに留まらないハンドボール関連人口の拡充を目指して、精一杯の努力をしたいと思います。

平成 27・28 年度（公財）日本ハンドボール協会・役員

役職名	氏名	職務分掌	生年
会長	渡邊佳英		1948
副会長	市原則之		1941
副会長	多田　博	日本リーグ機構会長・マーケティング	1945
特別顧問	山下　泉		1936
副会長(特任)	鶴保庸介		1967
副会長(特任)	橋本聖子		
副会長(特任)	齋藤　健		1959
副会長(特任)	八木秀記		1959
副会長(特任)	角　紘昭		1942
副会長(特任)	金丸恭文		1954
副会長(特任)	湧永寛仁		1973
副会長(特任)	岩瀬隆広		
顧問	大野金一		1937
参与	安藤純光		1929
参与	中澤重夫		1932
参与	佐野和夫		1929
参与	殿水幸雄		1936
参与	大西武三		1945
参与	塩川安賢		1938
参与	川上整司		1938
参与	藤森　徹		1947
専務理事	川上憲太	マーケティング本部長兼任	1947
常務理事	大橋則一	総務本部長	1967
常務理事	三輪一義	普及指導本部長	1965
常務理事	江成元伸	競技本部長、リオ五輪女子アジア予選プロジェクト担当	1950
常務理事	田口　隆	強化本部長	1961
常務理事	西窪勝広	日本リーグ委員長、2019 女子世界選手権担当	1954
常務理事	村林　裕	ガバナンス室長	1953
常務理事	志々場修二	事業本部長	1948
常務理事	藤井俊朗	競技副本部長・審判部長	1960
常務理事	津川　昭	2020 東京オリパラプロジェクト担当、国際部長	1951
常務理事	朝生和光	強化支援グループ長、倫理委員会委員長	1962
理事	土肥正彦	全日本社会人連盟	1957
理事	松井幸嗣	全日本学生連盟、強化担当（大学）	1957
理事	船木浩久	全国高体連専門部、強化担当（高校）	1956
理事	小越康雄	北海道協会	1952
理事	高山重雄	東北協会	1947
理事	中野利一	関東協会、20 万人会担当	1950
理事	行田　潤	北信越協会	1958
理事	丸山竜司	東海協会	1964
理事	中村博幸	近畿協会	1951
理事	山本　一	中国協会	1948
理事	佐藤公美	四国協会	1954
理事	田中　守	九州協会、技術委員会担当	1958
理事	東海林祐子	キャリアサポート専門委員会委員長	
理事	繁田順子	キャリアサポート専門委員会委員、全国理事長会担当	
特任理事	奥園栄純	2019 女子世界選手権担当	1964
監事	伊藤宏幸		1951
監事	近森克彦		1945

第6回 男子ユース世界選手権

Men's Youth (U19) Handball World Championship 2015 in Russia



主　　催：国際ハンドボール連盟
大会期間：2015 年 8 月 7 日（金）—8 月 20 日（木）
開催都市：エカテリンブルク（ロシア）

最終順位

優勝：フランス	5 位：スウェーデン	9 位：スイス	13 位：韓国	17 位：ドイツ	21 位：アルゼンチン
2 位：スロベニア	6 位：ノルウェー	10 位：ハンガリー	14 位：クロアチア	18 位：カタール	22 位：ベネズエラ
3 位：アイスランド	7 位：デンマーク	11 位：ロシア	15 位：エジプト	19 位：ポーランド	23 位：アルジェリア
4 位：スペイン	8 位：ブラジル	12 位：セルビア	16 位：チュニジア	**20 位：日本**	24 位：チリ

団長報告

団長　志々場 修二

はじめに

まず初めに、今回の 2015 世界ユース選手権大会の参加にあたり、多大なるご支援をいただきました日本ハンドボール協会をはじめ、選手派遣を快く受け入れてくださいました所属チーム関係者、日本から連日ご声援を送ってくださった皆様に対して心より御礼申し上げます。

大会総括

2015 世界ユース選手権大会は、開催地をロシアのエカテリンブルグにおいて 2015 年 8 月 7 日より 20 日まで開催されました。予選ラウンドは、6 チームごとに 4 グループに分かれました。D グループに入ったユース日本代表は、フランス・スロベニア・ブラジル・チュニジア・アルゼンチンと同組になり、今大会の注目チームであった、フランス・スロベニアと対戦できたことは、選手・スタッフにとっては良い経験になったのではないかと思います。予選ラウンド 1 勝 4 敗で 5 位となり、決勝ラウンドには進めませんでした。プレジデントカップにおいて、カタール・ポーランドに善戦するも連敗し、最終順位は 20 位で大会を終えました。

日本代表チームは、体格に勝る相手に対して粘り強く、そして勇敢に戦ってくれました。選手の頑張りに敬意を表するとともに、目標であった決勝ラウンドに進めなかったことに対して、選手たちが課題を抽出し、克服していくように更なる飛躍を期待しています。

大会に参加し、ヨーロッパ勢にはやはり力の差を感じるものがありました。予選ラウンドを突破し、決勝ラウンドに進出するためには、パンアメリカ・アフリカ・アジアの王者に勝てる力を身につけなくてはなりません。今回、チュニジア、カタールに対して勝てる力がなかったユース日本代表チームは、次のアジアジュニア選手権で上位に入れるかどうか不安があります。ヨーロッパの国々は、このユース大会において結果を残し、選手が如何にビッククラブへスカウティングしてもらうかをモチベーションの一つにしていると IHF 関係者から聞き、我々とのモチベーションの差を感じました。まず、アジアチャンピオンを目指し、国内でのトレーニング合宿や海外遠征の回数を増やす必要を感じます。そして、選手・スタッフが海外との差を肌で感じる機会を増やすことが必要です。この年代において、海外の選手はプロとしてすでに活動をしはじめ、個の強さを身につけています。日本の選手育成プログラムの見直しと、指導者の育成をさらに力を入れていかなければならないと、改めて感じた大会でありました。

おわりに

今大会に出場したユース日本代表チームの選手たちは、大会の反省を生かし、来年のアジアジュニア選手権及びアジアユース選手権に向けて良い準備をして更なる輝きを放ってほしいと切に願います。そして、2020 年に東京で開催されるオリンピックに一人でも多くコートで活躍してほしいと期待しています。

最後になりましたが、代表チームの大会参加にあたり選手派遣等ご協力をいただきました選手の所属チームの先生方、大会前の準備から大会後までサポートをいただいた日本ハンドボール協会事務局の皆様に改めて感謝申し上げ、今回の大会報告とさせていただきます。



選手名簿

役職	名前	所属
団長	志々場修二	（公財）日本ハンドボール協会・北陸高等学校
監督	内記　徹	（公財）日本ハンドボール協会・岩手県立不来方高等学校
コーチ	所　努	（公財）日本ハンドボール協会・岡山県立総社高等学校
GK コーチ	北林健治	（公財）日本ハンドボール協会・宮崎県立都城工業高等学校
ドクター	大西信三	（公財）日本ハンドボール協会・筑波大学附属病院
トレーナー	大岡恒雄	（公財）日本ハンドボール協会・マッターホルンリハビリテーション病院

背番号	名前	所属	出身校
1	褜屋竜流	国士舘大学	不来方高等学校
3	園田涼太	筑波大学	法政第二高等学校
4	康本侃司	日本体育大学	藤代紫水高等学校
5	田里亮稀	国士舘大学	興南高等学校
6	小澤　基	日本大学	函館有斗高等学校
7	伊舎堂博武	早稲田大学	興南高等学校
8	大谷由岐也	日本体育大学	北陸高等学校
11	安平拓馬	日本体育大学	氷見高等学校
12	森脇　龍	筑波大学	桜台高等学校
13	牧野イサム	筑波大学	松蔭高等学校
15	野村雄也	福岡大学	千原台高等学校
16	高光　凌	下松工業高等学校	末武中学校
17	山本祐輝	浦和学院高等学校	多摩青陵中学校
18	山田信也	愛知高等学校	天神山中学校
20	川上勝太	興南高等学校	浦添中学校
21	徳田廉之介	岩国工業高等学校	平田中学校
22	中村　光	藤代紫水高等学校	水海道西中学校



参加報告 U-19 男子日本代表監督　内記　徹

ロシアのエカテリンブルグで開催された第6回ユース世界選手権出場に際し、日本ハンドボール協会をはじめ、多くの関係者に多大なご理解とご協力を賜りまして、本当にありがとうございました。「決勝トーナメント進出」を目標に掲げ、日本代表としての誇りを持ち、チーム一丸となって全力で戦い抜きましたが、7試合で1勝6敗、参加24ヶ国中20位という厳しい結果で終えてきました。

2年前の前回大会は、日本男子アンダーカテゴリーにおいて28年振りの世界選手権出場を果たし、今大会で2大会連続の出場となりました。前回大会をコーチとして帯同させて頂いた私は、世界のハイレベルなスピードとテクニックを、映像等を通じて出来るだけ解りやすく選手に伝えてきました。また、身長2m・体重100㎏超える外国人選手が中央を強引に突破してくることを想定したトレーニングや前回大会の課題であったゴールキーパーのセーブ率について、北林健治GKコーチのもと徹底して基礎トレーニングを積み重ねてきました。世界で勝ち抜く十分なトレーニング期間を確保する事はできませんでしたが、前回大会を経験しているキャプテン康本侃司を中心に世界選手権に出場できる喜びと日頃支えて頂いている方々へ感謝し、真摯な姿勢でトレーニングに取り組み大会準備を進めました。

大会では想像以上に涼しい気候で、日本にとって滞在しやすい環境で行われました。大阪インターハイに参加していた高校生メンバーは遅れて参加となりましたが、ハードなスケジュールでありながらも体調を崩すことなく元気にプレーしてくれました。試合では、全試合全力で取り組みましたが、一度当たってももう一度攻撃してくる相手の力強さに体力の消耗が激しく、大会終盤には満身創痍の状態でした。世界との差は体格や体力面だけではなく、技術やスピード面でも大きな差を感じました。優勝したフランスは試合中ベンチにパソコンを持ち込み、相手チームの特徴を整理しながら試合を行っていました。相手の特徴を即座に見抜いて対策を講じていたり、弱い部分を徹底して攻撃したりと分析して実行するスピードが早いと感じました。また、選手も自立しており選手間のコミュニケーションや表現力は勿論のこと、相手がしっかり狙っているのか、回しているだけなのかで守り方を変えたり、各自がしっかり観察して考えて判断して攻撃したりしていました。

世界最高峰の世界選手権を経験し、日本選手たちは結果以上に大きく成長したと思います。我々も志々場団長をはじめ最高のスタッフ陣と苦しみながら戦い抜いた経験を必ず次世代に繋げていきたいと思っています。今後も引き続き、アンダーカテゴリーに温かいご支援ご声援を賜りますよう宜しくお願い致します。

参加報告 U-19 男子日本代表キャプテン　康本 侃司

ユース日本代表選手団は8月7日～8月20日に行われた世界選手権に出場しました。4グループに分かれた予選リーグ、及び予選突破チームによる決勝トーナメントが行わ

れ、我々日本代表は、決勝トーナメント出場（ベスト16以上）を目指し試合に臨みましたが、第20位という結果で大会を終えました。

これまで、ユース日本代表選手団はアジア選手権と東アジア選手権の二つの国際大会に出場しました。両大会においては、互角に戦える力があるものの、強豪チームには、フィジカル面や技術力の差で負けてしまった試合がありました。その敗戦の経験を踏まえ、世界選手権で目標を達成するため、個々の選手がフィジカル強化、技術力向上を努力するとともに、チームとしては武器である、DFからの速攻を繰り出すため、DFでの強いコンタクト練習やマイボールから相手のコートまで早くつなぐ練習など体が大きく、パワーのある他国の選手に勝つための練習を積み重ねました。

我々は予選リーグで、今大会優勝のフランス、準優勝のスロベニアと同一グループとなりました。両チームとの試合結果は、対フランスは18対27、対スロベニアは23対37という結果となりました。初めて対戦して、フランス・スロベニア両国は、身体能力、個人技など様々な面で想像以上に日本代表より勝っているということを実感しました。それは、シュートの決定率の高さやパス回しの速さ、DFのハードコンタクトなどです。来年、ジュニアのアジア選手権がありますが、そこで勝ち上がっていくには、まず当たり負けしないように体を一回り大きくすること、体格差を埋めるために瞬発力を上げること、最後の最後まで走り切れるように持久力を上げることが最善だと考えます。一人一人が今までより高い意識をもって取り組まなければなりません。個々の技術だけでなくチーム力、連携力を高めるため、コミュニケーションをしっかりとることが大事です。今大会での悔しさをバネに努力を重ねていきます。

昨年のアジア選手権に始まり、東アジア選手権、世界選手権に出場でき、たくさんの貴重な経験をすることができました。これも志々場団長をはじめ、内記監督、北林コーチ、所コーチ、大岡トレーナー、大西ドクターはもとより、協会関係者、日本から応援を送ってくださった方々のお陰です。本当にありがとうございました。

帯同報告　トレーナー　大岡 恒雄　マッターホルンリハビリテーション病院

今回、ロシアのエカテリンブルクで開催された第6回ユース世界選手権にトレーナーとして帯同させていただきました。私はNTCで行われた8月2日の直前合宿2日目よりチームに合流し、インターハイに出場していた選手5名や監督・コーチの合流は遅れましたが、大きなけが人もなく合宿を終え大会に臨めました。

開催地のエカテリンブルクは日本の夏に比べ気温や湿度が低く、最高気温20度前後、最低気温10度前後の日が多く、日本との寒暖差が大きかったです。体調不良者が出現することも予測されましたが、湿度低下による喉を傷める選手は若



干いましたがその他は特に不調者はいませんでした。ホテル食はビュッフェ形式で選手の口に合うものが多く体重が減少する者はほとんどいませんでしたが、メニューがマンネリ化していたため用意していた日本食により体重をコントロールしていた選手が多かったように思います。

予選リーグや順位決定戦を含め7試合を行いましたが、優勝国フランスや準優勝国スロベニアなど体格差のある選手との対戦が相次ぎ試合を重ねる毎に外傷者は増えました。主な外傷者は、相手との接触よる口腔内の裂傷、アキレス腱を損傷した2名は試合出場が危ぶまれましたが、大西ドクターの処置もあり2名とも試合に出場できました。その他、足関節捻挫や大腿部の筋挫傷等が発生しましたが、テーピングや電気治療等により試合を欠場する選手はいませんでした。昨年のアジア選手権では連戦の疲労により多くの選手にケアが必要でしたが、本大会では強い疲労感を訴える選手はなくケアの回数も減っていたことから、徐々に選手自身によるコンディショニングの意識が身についてきたのではないか感じました。また、本大会で関わった選手はこれからの日本ハンドボール界を背負っていく選手であり、プレーだけでなく体調やコンディショニング面でも自分自身でコントロールできる選手に育ってもらいたいと思っています。

最後に、本大会をサポートしてくださいました日本ハンドボール協会の皆様をはじめ、選手の所属チームの関係者の方々に御礼申し上げます。また昨年のチーム発足当初よりお世話になりました志々場団長、内記監督、所コーチ、北林コーチ、大西ドクターには心より感謝申し上げます。加え、これまでの帯同におけるトレーナー業において色々とご助言をいただいた高野内俊也トレーナーに感謝申し上げます。



練習会場にて選手の治療



試合中の負傷者への対応

戦　評

■８月８日（土）：Ｄグループ
日本　23（9－13, 14－15）28　ブラジル

２大会連続出場となったユース世界選手権が、東京との気温が20度程低いロシアのエカテリンブルグで開幕した。全国高校総体に参加していた選手４名と役員２名の到着が遅れている中、予選リーグ初戦のブラジルと対戦。スタートは康本・田里・伊舎堂・小澤・山田・安平・GK袰屋のメンバーで臨んだ。

前半は、ブラジルの高いプレスディフェンスにボールを回させてもらえなかったが、小澤の絶妙なサイドシュートや安平の回り込みシュートで得点した。ディフェンスでは、山田・小澤らで中央を高く厚くしブラジルの強引な突破と力強いピボットプレーを体を張って防いだ。徐々に相手のプレーに先読みすることができ、小澤・牧野のパスカットから得点を重ね、前半12分７対７の互角の勝負を演じた。その後、中央を広げられ相手エースに連続して中央から強引に打ち込まれたが、体重100kgを超えるブラジル選手に全員で立ち向かい約10分間無得点に抑え込み、前半を９対13で折り返した。

後半は、ブラジルが6-0ディフェンスに変化したところを焦ってディスタンスシュートに頼ってしまい、後半10分までに10対18とリードを許した。その後、園田･山田らで相手エースに牽制を仕掛けながらディフェンスで奮闘し、反撃のチャンスを狙った。諦めない日本は残り10分過ぎから野村のサイドシュートや大谷の速攻などで５連取したが、23対28で初戦をものにできなかった。

［個人得点］牧野：6点、安平：5点、野村：3点、田里・小澤・伊舎堂：2点、園田・康本・大谷：1点

■８月10日（月）：Ｄグループ
日本　18（12－15, 6－12）27　フランス

予選リーグ２戦目は先月のジュニア世界選手権で世界チャンピオンに輝いたフランスと対戦。試合前日にインターハイ参加組が合流し、世界へ全力でチャレンジする体制が整い、日本代表としての意識を高めて挑んだ。

前半日本は、前試合の反省を生かして緩急をつけたボール回しとボールをもらうタイミングを意識して攻撃に入った。２m級の選手が並ぶフランスのディフェンスに小澤のポストシュート、山田のステップシュート、伊舎堂のサイドシュートとポジションをかえながら得点を重ねリズムをつくった。ディフェンスでは、身体能力が非常に高いフランス選手の攻撃に全員が手足を動かしながら対応した。フランスのクロス攻撃に対策していた日本はタイミング良くプレスディフェンスを仕掛け、相手のオフェンスミスを誘い、前半15分まで９対９の同点で進んだ。その後ポストプレーへのカバーが遅れたところを、連続して退場者を出してしまいフランスに５連続得点を与えた。日本もチャンスをつくりながらもミスが続いたがGK袰屋と中村の活躍もあり、前半を12対15で折り返した。

後半、立ち上がりはフランスの豪快なロングシュートとサイド・ポストにも振り分けられ失点を重ねた。日本も負けじと伊舎堂のミドルシュートと牧野のブレイクスルーで得点し、日本らしい粘りをみせた。その後も攻撃回数を減らし、フランスの隙を見てチャンスを狙ったが、ディフェンスでの体格差で連続して退場者を出してしまい流れを掴めなかった。フランスは選手層の厚さを見せ、堅いディフェンスと幅のある攻撃で手を緩めなかった。後半はフランスに６得点に抑えられ18対27で敗れた。

［個人得点］牧野：6点、伊舎堂：4点、康本･山田：2点、田里・小澤・安平・山本：1点

■８月11日（火）：Ｄグループ
日本　24（11－11, 13－12）23　アルゼンチン

予選リーグ３戦目は前回大会よりもスケールを増したアルゼンチンと対戦。予選リーグ突破に向けて、お互い勝ち星がない中、絶対に負けられない一戦。

前半立ち上がりは、アルゼンチンの長身エースを警戒していたが、予想以上にパワフルでステップワークに幅があり、連続して得点を与えてしまった。日本は田里のカットインや山田のポストプレーで得点するが、相手のポイントマンツーディフェンスに焦って攻撃し、12分までに３対７とリードを許した。タイムアウト後に落ち着きを取り戻した日本は、園田の攻撃的なディフェンスからGK袰屋が当たり出し、小澤の速攻などで流れを引き戻した。その後、攻撃のリズムを掴みきれなかったが、代わって入った大谷、山本のロングシュートが冴えわたり前半を11対11で折り返した。

後半は、チーム一丸となってディフェンスに集中して粘り強く取り組み、山本、野村の連続速攻で立ち上がり４連取し試合の流れを掴んだ。一気にリードを広げたい日本だったが、牧野の負傷退場や相手GKの好セーブに阻まれ、後半11分17対16の１点リードに戻された。その後お互い退場者を出しながら、徳田、野村らの粘り強い攻撃で加点し、残り５分22対21となった。終盤はお互いタイムアウトを取りながら緊迫した攻防が続いたが、川上の隙をついた絶妙なポストプレーが連発し、24対23で嬉しい世界選手権初勝利をものにした。

［個人得点］安平・山本：4点、小澤・牧野・野村・川上：3点、田里・大谷・山田・徳田：1点

■８月13日（木）：Ｄグループ
日本　23（13－19, 10－18）37　スロベニア

予選リーグ４戦目は、未だリーグ戦負けなしのスロベニアと対戦。大型選手とのハードなコンタクトで負傷者が増えている中、野村・山本・伊舎堂・小澤・山田・大谷・川上・GK袰屋でスタートした。

前半立ち上がりは、相手の力強いデイフェンスから距離を取りながらボールを回し、山本のブレイクスルー、野村のサイド、伊舎堂のミドルで得点をあげた。スロベニアは、力強さに機敏さを兼ね備えており、日本の得点後には積極的にクイックスタートを仕掛けてきた。ディフェンスでは大谷・山田・小澤らの高さを生かして対応したが、更に長身のポストとスピードあるサイドに展開され、前半20分までに９対16とリードを許した。その後ディフェンスラインを調節しながら対応し、攻撃では徳田・山本の隙をついたロングシュートが決まり前半を13対19で折り返した。

後半は、ディフェンスの要である山田が負傷退場してしまいディフェンスでリズムをつくることが困難になった。反撃の切っ掛けが欲しい日本は、相手のラフなディフェンスに川上がユニフォームを破られながらチャンスをつくった。勇気を持って飛び込んだ伊舎堂が後半６得点の活躍をみせた。高いプレスディフェンス等で相手のミスを誘ったが、最後まで強引な突破を止めることができず、23対37で大敗した。

［個人得点］伊舎堂：8点、田里：4点、安平･山本：3点、小澤・野村・山田・川上・徳田：1点

■８月14日（金）：Ｄグループ
日本　26（12－14, 14－15）29　チュニジア

予選リーグ５戦目は、１勝３敗で並ぶチュニジアと対戦。お互い決勝トーナメント進出をかけて絶対に負けられない一戦。

戦評

前半立ち上がりは、緊張からか失点したくないポスト・カットインで連取されたが、相手のミスから安平・小澤の連続速攻で流れを引き戻した。相手の攻撃には良く足が動いていたが、強引な突破に退場者を出してしてしまい先行される序盤となった。早く追いつきたい日本であったが、攻撃で慌てずバランスよくボールを回し、牧野のフェイントから田里・伊舎堂のカットインで相手ディフェンスを崩し得点した。ディフェンスでリズムをつくりたかったが、強引な1対1に利き腕に入りきれず守り切れない時間帯が続いた。チャンスをものにできず苦しい状況が続いたが、全員で粘り強くゴールを狙い、相手のラフプレーから安平が落ち着いて7mTを決め、前半を12対14で折り返した。

後半は、相手4人でスタートし一気に追いつき追い越したかったが、相手の厚いディフェンスに思うようにチャンスをいかせなかった。この間GK袰屋が踏ん張り、山本・山田の連続速攻で後半8分15対16に追い上げた。その後も相手の退場で日本のペースが続いたが、ディフェンスの連携ミスと焦ったテクニカルミスで相手に流れを持っていかれ、残り6分19対25とリードを広げられた。最後まで試合を諦めない日本は、伊舎堂の3連打や牧野の体勢を崩しながらのシュートで残り1分2点差まで詰め寄ったが、26対29で大事な一戦をものにできなかった。

[個人得点] 安平:8点、伊舎堂:6点、田里:4点、山田:3点、小澤・牧野:2点、山本:1点

■8月16日(日):17－20位決定戦
日本　23（9－14, 14－13）27　カタール

予選リーグを1勝4敗で終え、17位から20位の順位決定戦に回った日本は、同じアジアから出場のカタールと対戦。目標としていた決勝トーナメント進出を絶たれたが、日本代表として世界の大舞台で戦う姿勢を崩さず、一つでも順位を上げる意思を固めて臨んだ。

前半立ち上がりは、警戒していたポストを自由にさせない連携したディフェンスで対応したが、大型バックプレーヤーに隙を突かれ先制を許した。攻撃では大型のカタールに康本・田里・伊舎堂のバックプレーヤーで幅広くボールを回したが、ポスト山田を徹底して守られ簡単に突破できなかった。追いかける展開となった日本は、園田の攻撃的なディフェンスから徐々にリズムを掴み、伊舎堂のフェイントシュートや康本のロングシュートで前半13分5対6と連続得点から流れを掴んだ。ゴールキーパー袰屋がディフェンスと連携して当たり出し、チャンスを作り出した日本であったが、相手ゴールキーパーに連続して阻まれ、前半を9対14で折り返した。

後半もゴールキーパー袰屋が立ち上がりから奮闘し、攻撃へチャンスをつくり一進一退の攻防が続いた。大谷の豪快な回り込みシュートや田里の速攻からの突破が決まるも、肝心な場面でのシュートミスが重なり、後半12分13対20と逆にリードを広げられた。攻守ともにチャンスをつくれている日本は、田里・山田・大谷の三連取で、残り7分19対23の4点差まで追い詰めた。終盤の体力的に苦しい場面でも園田・山田・小澤らの体を張ったディフェンスから、途中出場の森脇が好セーブを連発したが得点が伸びず、23対27で敗れた。

[個人得点] 田里:5点、伊舎堂:4点、康本・小澤・大谷・山本:3点、野村・山田:1点

■8月17日（月）:19－20位決定戦
日本　24（13－15, 11－14）29　ポーランド

ユース世界選手権の最終戦はポーランドと19・20位をかけて対戦。ポーランドは前日ドイツに大敗しているが、身長・パワーはトップクラス。最終戦を白星で飾りたい日本は、最後の力を振り絞ってチーム一丸となって臨んだ一戦。

前半立ち上がりは、緩急をつけたボール回しから伊舎堂のミドルシュート・康本のステップシュートが決まり好スタートを切った。ディフェンスでは園田の牽制から小澤・山田らで中央を厚く守り抜いたが、決定力あるサイドに振られ失点を重ねた。粘りたい日本であったが、徐々に相手のパワーのあるディフェンスにパスミス・シュートミスを重ねてしまい、前半15分で6対10とリードを奪われた。日本は逃げずに攻撃を仕掛け、田里のスカイプレーや川上の粘り強いポストプレーで前半26分13対13の同点に追いついた。リードして前半を終えたかったが、相手の的確なボール回しからミドルシュートを打ち込まれ13対15で前半を折り返した。

後半立ち上がりは、大谷のロングシュートや小澤のサイドシュートで対応するが、相手の高い壁に阻まれ逆に速攻を仕掛けられた。ディフェンスで粘り続け速攻につなげることができてきたが、焦った判断がミスになり後半10分16対22とリードを広げられた。その後も諦めず突破を続け、相手のラフプレーで獲得した7mTを安平が確実に決め続けた。パワーに勝るポーランドは、退場者を出すものの高打点からのロングシュートや巧みなポストプレーで後半20分20対27とリードを広げられた。日本は最後まで諦めずメンバーを代えながらプレスディフェンスで応戦するが、24対29で敗れた。最終戦を終え、ユース世界選手権20位という結果となった。

[個人得点] 伊舎堂:6点、安平:4点、康本:3点、田里・小澤・山本・川上:2点、大谷・山田・徳田:1点

審判報告

男子ユース世界選手権に参加して

本田 昭太・田渕 元雄



今回、ロシアのエカテリンブルクで行われた、男子ユース世界選手権に参加させていただきました。ロシアの気候は、日本の秋ぐらいの陽気でとても過ごしやすかったです。会場も大会に向けて準備されていました。ボランティアの人たちの人数が多くいたことにも驚きました。私たちは今大会、4試合（予選リーグ3試合、8ファイナル1試合）を吹笛しました。

まず大会前には必ず、ミニコースが行われます。今回のミニコースの内容は、今後のルール改正に向けての今大会でのルール試行の解説、7mスローの判定に関すること、ウィング・ピボットプレーに関することを中心に講義がありました。7mスローの判定に関しての講義では、ルールブック14の2に、「プレーヤーがボールと身体を完全にコントロールしている状態ならば、たとえプレーヤーが明らかな得点チャンスを活かせなかったとしても、7mスローを判定する必要はない。」と明記されていることを再確認しました。簡単に7mスローを与えてはいけないという内容でした。大会期間中にPRCのメンバーは簡単に7mスローを与えてしまうことを、「チープ7m」と表現をしていました。また、ウィング・ピボットプレーに関しては、日本の各審判研修会で用いている、スライドを使っての確認でした。ミニコースで一番大きな講義内容になったのは、今大会でのルール試行についてです。

○コートプレーヤーになったゴールキーパー

ゴールキーパーに代えて7人目のコートプレーヤー（コートプレーヤーのユニホームのまま）を入場させることができる。しかしこの場合は、ゴールキーパーと同じ色のシャツに着替えない限り、誰も自陣のゴールエリアには入れません。現行どおりのまま行うことを許されていました。

○パッシブプレーについて

予告合図の後、攻撃チームは5～8回のパスの後にシュートしなければならない。最大で8回のパスの後に、シュートしなければパッシブプレーの違反となり相手チームにフリースローが与えられる。

予告合図の後に攻撃側チームにフリースローが与えられた場合にもパスの回数は継続される。防御側チームがシュートをブロックした場合もパスの回数は継続される。（いずれも回数はリセットされない）

攻撃側が8回のパスの後、レフェリーがパッシブプレーの判定（違反の笛を鳴らす）までの間に、防御側チームが違反をした場合は、攻撃側にフリースローが与えられる。この場合攻撃側には1回のパスが認められ攻撃を完了するか、フリースローを直接シュートしなければならない。

○プレーヤーの負傷

レフェリーがタイムアウトを取り、プレーヤーにそのままプレーを続けるか、コート外での治療行為を受けるか、コート上で治療を受けるか尋ねる。治療のための入場許可を与えた（ジェスチャー16）場合は、チームドクターはコートに入らなければならない。

指示に従わなかった場合は、スポーツマンシップに反する行為として罰則の対象となる。

コート上で治療行為を受けた後、プレーヤーはコートを出なければならない。このプレーヤーが再びコートに入場できるのは、3回の攻撃が完了した後である。1回の攻撃の完了とは、得点するか攻撃側がボールの所持を失った時である。攻撃側チームのプレーヤーが負傷し治



療行為を受けた場合には、再開後の攻撃が1回目となる。プレーヤーが3回の攻撃を終える前に入場した場合には、不正交代として扱う。

○終了間際の違反

終了間際とは、終了までの30秒間とする。これは第1・第2延長戦の後半も同様である。

①8：10（c）終了間際、競技の中断中における極めてスポーツマンシップに反する行為
【現行】報告書を伴う失格⇒【試行】報告書を伴わない失格＋7mスロー

②8：10（d）終了間際、インプレー中の8：5（失格）に該当する違反行為
【現行】報告書を伴う失格⇒【試行】報告書を伴わない失格＋7mスロー

③8：10（d）終了間際、インプレー中の8：6（報告書を伴う失格）に該当する違反行為
【現行】報告書を伴う失格⇒【試行】報告書を伴う失格＋7mスロー

④上記②③の場合、アドバンテージルールを適用し違反されたプレーヤーが得点した場合は得点を認め、7mスローは与えない。違反されたプレーヤーがパスをし、味方プレーヤーが得点できなかった場合は7mスローを与える。違反されたプレーヤーがパスをし、味方プレーヤーが得点した場合は得点を認め、7mスローは与えない。

○ブルーカード

失格を判定した際、報告書を伴うか伴わないかが不明確なため、報告書を伴う失格の場合、レフェリーはレッドカードを上げた後、短い協議の後にブルーカードを上げる。

この5つの試行ルールが行われ、PRCのメンバーに確認をしたところ、今回の試行ルールが採用ならば2016年リオオリンピック後に正式発表されるということでした。私たちがこの試行ルールでレフェリングした感想は、パッシブプレーの予告合図を上げてから、パスの回数を数えなくてはならないということは、慣れるまではとても違和感があり、難しかったです。チームにも今回の試行ルールの内容はしっかりと伝達されていたということもあり、自らコート外に出られる負傷であれば、立ち上がりベンチに戻っていました。そのため試合はスムーズに進むことが多かったです。全体の試合時間に関してPRCのメンバーはだいぶ気にしているようで、試合が開始し終了するまで、85分で終了できるようにとの助言がありました。

今回私たちがユース世界選手権で指導された内容は、自分たちがどんなハンドボールをさせたいのか、しっかり手の中でゲームをコントロールできるようにということでした。どんなプレーに対しても毅然と判定することが大切ということです。その他にも、はじめに起こった現象をしっかりと判定するということです。それが遅れてしまうとチームに不信感が生まれてしまうからです。

大会を終えて感じたことは、自分たちのやってきた取り組みは決して間違えていなかったということです。今回のミニコースやレフェリーミーティングでの指導内容が、普段から私たちが意識しながら取り組んでいることでした。罰則の基準では、警告と一発退場の違いや、失格プレーと失格＋報告書のプレーの違いを、映像を用いてわかりやすく説明を受けました。映像を見ながら罰則のプレーを確認していくと、私たちは正しい感覚を持てていることを確認することができました。ステップに関しては、ほとんどレクチャーは無く試合を見ていて、どのレフェリーも感覚で判定している印象でした。ステップの現象に白黒付けるのではなく、その場の雰囲気や空気感など、ゲームをコントロール、マネジメントするという意味でのステップの判定だと感じました。当然のことですが、一度取られたステップは、再度同じステップを踏むと相手ボールになっていました。最後に一番感じたことは、選手・チーム役員・レフェリー・大会役員・ボランティアがお互いを尊敬、尊重し合っているということです。それぞれに役割があるように大会運営では、なくてはならない存在だと思います。お互いを理解し、認め合いながら大会が進んでいったことはとても印象に残りました。

最後になりましたが、初めて世界選手権に参加させていただくことができたのは、職場の皆様、日本協会の皆様、レフェリーファミリー、また多くの関係者の皆様に、多大なるご支援をいただいたからこそだと強く感じております。ありがとうございました。今大会での経験を日本のハンドボールの発展の力になれるよう、今後も精進していきたいと思います。



第13回 女子ジュニア アジア選手権

13th Asian Women's Junior Handball Championship

主　　催：アジアハンドボール連盟
大会期間：2015年8月6日～8月14日
開催都市：アルマトイ（カザフスタン）
参加国数：6ヶ国（タジキスタンは大会直前に棄権）
　　　　　日本、韓国、中国、カザフスタン、ウズベキスタン、イラン
競技方式：1グループ1回総当たりにより順位を決定する。
　　　　　上位5チームが2016女子ジュニア世界選手権に出場できる。

【最終順位】
優勝：韓国
2位：日本
3位：カザフスタン
4位：中国
5位：ウズベキスタン
6位：イラン

選手名簿

役職	名前	所属
団長	津川　昭	(公財)日本ハンドボール協会常務理事
監督	辻　昇一	(公財)日本ハンドボール協会、日本体育大学
コーチ	山田永子	(公財)日本ハンドボール協会、筑波大学
ドクター	井本光次郎	(公財)日本ハンドボール協会、熊本赤十字病院
トレーナー	岩谷美奈子	(公財)日本ハンドボール協会、東京・目黒ながい接骨院

	名前	所属	出身校
1	岩見佳音	三重バイオレットアイリス	洛北高校
4	團玲伊奈	東京女子体育大学	埼玉栄高校
6	藤田明日香	ソニーセミコンダクタ	四天王寺高校
7	三橋未来	東京女子体育大学	佼成学園女子高校
8	高杉桃加	オムロン	岩国商業高校
9	河原畑祐子	筑波大学	佼成学園女子高校
10	斗米菜月	東京女子体育大学	佼成学園女子高校
12	神谷怜名	日本体育大学	名経大市邨高校
13	山口絵梨香	北国銀行	神戸星城高校
14	眞方彩帆	東海大学	埼玉栄高校
15	本間　麗	日本体育大学	宮崎学園高校
16	中野智佳	東海大学	小松市立高校
20	澤井咲良	オムロン	福岡女子商業高校
21	青　麗子	白梅学園高校	東久留米市立西中学校
23	登川　愛	筑波大学	コザ高校
24	伊地知美姫	オムロン	鹿児島南高校
補欠	牧岡咲良	日本体育大学	柏崎高校

第13回女子ジュニアアジア選手権大会報告

団長　**津川　昭**

カザフスタンの国情について

カザフ人の多くはイスラム教スンニ派で他はロシア正教との事だが、親日的で顔つきも日本人にとても良く似ている。豊富な地下資源にも恵まれ、経済発展が進んでいる。二年前には無かった地下鉄も開通したとの事、ただ貧富の差が出つつあり、国籍を問わない強盗事件が多発傾向にあるとのこと。この時期日中はかなり暑いが、日暮れからは涼しく過ごしやすい。スポーツ活動もかなり積極的で、冬の競技だけでなく、レスリングや柔道などの国際大会も誘致している。

大会運営について

タジキスタンが棄権し試合日程が変更されたのは仕方ないにしても、二度にわたり試合時間の変更が言い渡された。特に韓国との決勝も前日に試合時間の変更が言い渡された。急にフェアウェルパーティーが入ったりした関係もあるのだろうが、あまりスムースな大会運営とは言えない。

レフリーはバーレーン、クウェート、韓国などから招聘されていたが、レフリングに関しては公平性が保たれていた。

ドーピングは実施されなかった。

警備は、各試合6～8名ほどの制服を着た軍人らしき人が配置されていたが、特に警棒その他の装備はされていなかった。また、会場入口での荷物検査などもなかった。

今回、大会会場となったのはカザフスタンの体協にあたる施設のホールで、観客席も5～600程度の古いもの、空調設備も無く日によってはかなり暑かった。施設内には製氷機も無く、また大会スポンサーから提供される飲料水は硬水のため、練習、試合前には毎回スタッフが氷と軟水のミネラルウォーターを購入に走った。

毎試合ネットによる中継かTV放送がされたようだが、詳細不明、放映時間も生中継ではなく、よくわからない。少なくとも放送席などは準備されておらず、解説などを入れたとしてもスタジオで入れたと思われる。

ホテルから試合（練習）までは徒歩で約15分程度であったが、送迎のマイクロがあったり、なかったり。徐々に改善されていったが、日本人的感覚からすると時間にルーズな面がある。日本チームの選手係りは日本語を専攻する女子大学生。彼女達はボランティアにも関わらず献身的に動いてくれた。ちなみに他の競技（体操やスケート）では日当が支払われるとのことで、カザフハンドボール協会の財政も厳しいのかもしれない。

ホテル・食事

前回の山の上のホテルとは異なり、今回は町中の4星ホテル。日・中・韓・イランが同じホテルに滞在。ただ部屋の割り当て数が前回同様大会要項に記載されているものと異なり、スタッフへのシングルルームの提供がされていないどころか、当初男性スタッフをトリプルにしていたとの事、これ

は日本側からAHFに直訴し、もう一部屋TWが追加されたとの事。いずれにしても毎回このような事が起きているので、今後も事前に確認するようにした方が良い。食事は相変わらず日本人の味覚には合わず、バイキングメニューも毎日ほとんど変わらない。前回の経験から日本食を準備していたので、選手はそれを捕食とした。

ネット環境は良好。ランドリーサービスは実施されていない。ミーティングルームの提供はあるが電気がつかない（意味不明)。

医療事情など

今回、5件の怪我・障害が発生した。膝の靭帯損傷、肩関節の脱臼、足首靭帯損傷、手指強打による突き指、踵の炎症（正式障害名有)。

その内、膝靭帯についてはドクター帯同のもと現地病院で受診、いわゆる公共の病院と民間の病院があり、公共の病院で受診したが、MRIが無く、レントゲン撮影のみ、帰国後にしっかり受診することとした。民間病院にはMRIが設置されているところもあるようだが、かなり高額とのこと。全般的には施設、治療法とも大分遅れがあるようだ。肩関節の脱臼についてはその場で帯同ドクターが処置し、帰国後再受診の予定。

女子のハンドボールも激しいコンタクトスポーツに移行しているが、日本選手の無防備ぶりが目に付く、今にも怪我をしそうでハラハラする。特にこれだけ体格の違う国際試合になると身を守る術をもっていないと大怪我につながる。プレー上の為だけの筋力アップではなく、身を守るための筋力アップも必要。また、国内のゲームも中・高・大と段階的にコンタクトの度合いを強めていく必要があると思われる。また、踵の炎症であるが、ドクターによると同じ症状を持つ選手が結構いるとの事（日本の女子ハンド選手に)、シューズメーカーとタイアップしインソールの改良など、何らかの予防が可能かもしれない。

選手の編成について

今回初の試みとしてU-22東アジア選手権大会（6月23日～29日台湾）に、このU-20ジュニアチームを派遣し、国際大会の経験を積み強化を図ったが、結果的に6名の選手を入れ替えることとなり、選手の招聘にスタッフは苦労したようである。6名の内の5名は関西の選手であり、ちょうど西日本学生選手権と日程が重なり、自ら辞退したとの事である。詳しいいきさつは分からないが、この世代は東京五輪に向けてのターゲットエイジであり、事前に西日本学生の日程変更はできなかったのか、また、二度遠征することから自己負担金も倍額かかっており、親の負担を気にした選手がいなかったか、大いに気になるところである。今回は幸いなことに、後から選出された選手にも好選手がいて、十分戦力になりうる可能性を見いだせた。来年は世界選手権であり、時期的に同様の課題が再発する恐れがある。U-20として22名ぐらいで編成し、テストケースとしての東アジア選手権をこなしたうえで、よりベストメンバーで世界戦に臨めるようJHAとして対応すべきと考える。

日本チームについて

前述のとおり、東アジア選手権後選手を再選出し、一度の合宿と直前二日程度の練習での本番大会であった。普段やり慣れないポジションを任された選手もいたが、ゲームをこなすごとにチームとしての戦い方、完成度が高まっていった。少ないコアメンバーに更に追い打ちをかけるように怪我人も続出したが、上手くやり繰りし、選手もそれに応えて自分の持ち味を発揮してくれた。監督、コーチの手腕も素晴らしいものがあった。チーム戦術として採用している攻撃法も、クロスに深みがあり各国に対し有効であった。

決勝で韓国に1点差で敗れ2位という結果ではあったが、同点では得失点で追いつかないが故勝負を賭けた事もあり、引き分けに持ち込める可能性は十分にあった。この世代は、昨年ユースの世界選手権に出場しているが、韓国が5位、日本は14位であった。ただ日本の14位の内容には大きな変化があり、ハンガリーに1点差、ロシアに3点差など僅差の負けと、ノルウェーに引き分け、フランスに6点差勝利、また韓国とも対戦しており、この時は42対32で敗退している。要するに世界と戦いうる可能性を秘めた選手達であると言うことができると考える。劣勢に追い込まれても動じることなく、淡々と自分のプレー、自分たちのプレーに集中し、チャンスをうかがい、自分たちへの流れを待っている。そんな「逞しさ」を感じさせてくれる選手・チームであった。日本スポーツ界は特に女性の活躍が目立つが、こういった精神力は、鍛え育て上げられたものがあるかもしれないが、それよりは、「今風世代の強み」と考える方が自然と思う。

まとめ

今回、選手、スタッフの頑張りで、もう一歩のところまで詰め寄ることができたが、これからの1年が非常に大切な期間になると思われる。また、ユース・ジュニアが2年単位の区切りとなっているために、どうしても上の年齢が主体のチーム編成となりがち（例えば今回の場合なら高3と大1、早生まれの大2）で、インターハイの関係もあり、高3は一人しか選出されていない。つまり現高3の選手は、ユース対象選手からも外れ、国際大会出場の機会に恵まれないことになる。将来が大変有望な選手もいるとのことで、それらを早く吸い上げ、上につなげるためにも、年間を通じた強化・育成策を討議・検討頂いて早急に実施願いたい。

熊本、東京を前に、ジュニア世界選手権での日本チームの活躍は必須であり、年代的にも熊本、東京の前哨戦とも言える。これだけのメンタルと技術を持った選手達だから、まだまだ伸びしろも多く、可能性も高いと考える。

最後になりましたが、選手、スタッフを派遣いただいた所属および所属チームに御礼申し上げます。ありがとうございました。



参加報告　U-20女子日本代表監督　辻　昇一

今回、U-20女子日本代表が第13回女子ジュニアアジア選手権で戦うことに際しまして、日本ハンドボール協会、各選手所属チーム関係者の皆様、株式会社エモックエンタープライズ様、及び各方面から様々なご支援を戴きました多くの方々に厚く御礼を申し上げます。

私達、U-20女子日本代表は、来年ロシアで行われる第20回女子ジュニア世界選手権の出場権獲得とアジアでの優勝をめざし、今大会に向けて準備していきました。

選手選考に関しましては、国内スケジュールの関係等が絡み、6月のU-22東アジア選手権で戦ったメンバーから6名を入れ替えることとなりました。今回、緊急に招集させて戴いた選手達もおり、急遽選手を派遣してくださった各所属チームの関係者の方々には、ご理解とご協力戴いたことに感謝申し上げます。大会への準備としては、短い時間の中でも、時間を有効に使い、簡単な戦術を落とし込みながら、選手達には、日本代表として戦う姿勢のほかに、「主体性を持とう」、「能動的に動こう」、「コミュニケーションとろう」、そして、「Positive Mental Attitude」（積極的心構え）といった行動や振る舞いをお願いしました。

また、出発前には女子日本代表チームのご協力を戴き、実戦トレーニングを何度かご一緒させて戴いたことは、チームにとって大きなプラスとなりました。

今大会は、中央アジアのカザフスタンでの開催ということで、選手のコンディションや体調を保つための準備を怠らないように心掛けました。お米25キロ、炊飯器2台、レトルト食品等の日本食を持参し、現地入り後も、「硬水」「軟水」の体調への影響の違いを捉え、スタッフが常に水の確保に動いてくれました。

27時間の移動を経て、8月4日の朝に現地に入りました。大会運営は杜撰な部分があり、タジキスタンの棄権により試合日程が変更になったことに加え、滞在費や食事時間、練習時間、試合時間等が急に変更になるなどしましたが、山田コーチの語学力と交渉力により、日本チームは早めに手を打つことができ、様々なトラブルを回避することができました。

初戦のイラン戦は、試合開始から硬さがみられ、前半はチームとしての戸惑いが見られましたが、後半は調子を戻し、35対21で勝利しました。試合会場が暑く、標高も1000m近くあり選手達は息苦しさを感じているようでした。また、ポジションに慣れていない選手もおり、大会を通してコミュニケーションを積極的にとることで補っていくことを確認しました。また、この試合でGK中野が足首を捻挫し、数日動けない状態となりました。

2戦目は中国でした。エースのLin Yanqunの得点力があるので、DFでしっかり守ることを行い、攻撃ではポストの青が10得点、ポストとバックプレーヤーの両方で伊地知が7得点と活躍し、GK神谷も中野の代わりに踏ん張り33対25で勝利しました。

休養日を挟んで8月10日に地元カザフスタンと対戦しました。ナショナル、ジュニア、ユースと韓国の指導者が一貫指導しており、代表にも選出されている192㎝のポストArailや非常に得点能力が高く強気で狙ってくるエースのVeronikがおり、力があるチームでした。日本はスタートからVeronikに4連取され、彼女を徹底マークする作戦で戦

いました。前半は15対16の1点ビハインドで折り返します。後半スタートから高杉、伊地知、藤田の3連取で逆転し、Veronikをマークすることでリズムを崩した相手のシュートを、2日間休養し復帰したGK中野が好セーブをしてくれて、後半リードを保ち31対26で勝利しました。しかし、後半にDFの要として好調を維持していた伊地知が、速攻時に横からのDFを受け膝を負傷し、以後の試合に出場することが出来なくなってしまいました。

2日間の休息日には、韓国戦の対策を行いながら、ウズベキスタンとの試合に備えました。この期間にディフェンダーの三橋が足の痛みを訴えてプレーが出来なくなり、予想外の戦力ダウンを余儀なくされました。

ウズベキスタン戦は、伊地知、三橋が抜けた部分を青、河原畑、眞方で補うことになりましたが、今大会安定していた河原畑、斗米を中心に攻撃を組み立て、DFでは代役で入った眞方が7得点の活躍をみせてくれ、39対19で勝利しました。しかし、この試合でノーマークをセーブしたGK神谷が右肩を脱臼し、戦線離脱となってしまいました。

最終戦の韓国は、6月のU-22東アジア選手権時から2名の選手を追加しているように見受けました。国内リーグから引き戻したとの情報もありました。そのうちの一人である左腕右バックのPARK Junheeのロングシュートは威力があり、各試合で高得点をマークしていました。それまでの各試合をスカウティングして分析を行い、出来る限りの準備をして試合に向かいました。前半は今大会好調を維持していた河原畑のロングが決まり、斗米のゲームメイク、園、藤田のサイド陣も安定して力を発揮していました。DFでは東アジアの反省からいくつかの変更を行い意志統一を図って戦いました。攻撃､速攻共に効果的に行い前半を17対14で折り返します。しかし、ハーフタイムでセンターDFを守っていた青が足の故障を訴えて、ベンチに下げざるをえないことになり、急遽DFを変更し対応することにしましたが、後半10分までにDFが後手に回ったところをPARK Junheeに撃ち抜かれ、ポストも使われて19対20となりました。それでも眞方、澤井、高杉がポスト、右バックの代役を果たし、それぞれに持ち味を発揮してくれて、また、キャプテン河原畑、藤田、園らが意地をみせ、足の故障があった青も7mTのみでありましたが、きっちり仕事をしてくれ、韓国に離されることなく残り1分まで1点差で推移しました。残り1分を切ってから、韓国の反則と思われたプレーに､速攻に走った日本でしたが、判定はフリースローとなり、飛び出した日本は戻れず決められ、これが決勝点となりました。結果29対30で敗戦となりました。

今大会での日本チームは、日を追うごとに、それぞれの役割を自覚し、チームとしてタフになっていったように感じます。準備段階からの韓国戦まで、様々な逆境の中で、明るく、前向きに、物事を進めてくれました。怪我人が出てしまったことは、選手本人、チーム関係者に大変申し訳なく思っております。早期の復帰を願うばかりであります。



津川昭団長には、お忙しい時期にカザフスタンまで来て頂き、試合時のビデオ撮影まで買って出るなど、時には熱く、時には諭すように高所大所から貴重なアドバイスを戴きました。チーム帰国時には空港に出迎えに来て戴き、お気遣いに感謝致します。山田永子コーチは自身の選手経験、国内外でのコーチング経験、海外生活経験をフル活用し、チームの動き全般に渡り、本当に精力的に動いて戴きました。そして、選手が能動的に動けるようにトレーニングから生活まで配慮して戴きました。井本光次郎ドクターは、怪我発生の際に現地の救急スタッフ、病院とのやり取りなど、慣れない環境の中で選手の為動いて戴き大変助かりました。岩谷美菜子トレーナーは、初の海外遠征でありましたが、選手の心身のケア、体調管理、そして山田コーチと共に選手の補食作りなど、1日中動き回って戴きました。スタッフの皆さんの献身的な働きに感謝申し上げる次第です。

チームは来年のジュニア世界選手権の切符を獲得しました。韓国はジュニア世代にも、人的、物的なエネルギーを投入しているのを強く感じました。カザフスタンも韓国人指導者を招聘し強化しています。U-20女子日本代表はこれから世界選手権に向けて強化を進めていくことになります。今大会での反省を活かして、スタッフ、選手ともに日々を積み重ねる中で世界を意識し、戦う準備をし、それぞれの能力を最大限に引き上げていくことが必要であると感じています。

参加報告　U-20女子日本代表　河原畑 祐子

初めに、8月6日～14日にかけてカザフスタンで行われましたU-20アジア選手権大会において、多大なるご支援とご声援をいただきありがとうございました。

今大会に臨むにあたってU-22東アジア選手権大会で痛感した韓国との差をどうやって埋めるのか、どうしたら追いつき追い越せるのか、試行錯誤しながら臨んだ大会でした。参加国は地元カザフスタンをはじめ、韓国・中国・ウズベキスタン・イランと日本の6か国でした。世界選手権の切符を

手に入れることを第一の目標とし、アジア1位での世界選手権出場を目指していました。

とにかく今大会ではチームを結成してから大会に臨むまでの期間が短く、新しいメンバーも増え、自信をもって大会に臨めたとは言い切れない状況でした。しかし辻監督や山田コーチが口癖のようにおっしゃっていた「一日一日、一戦一戦少しずつでもチームがよくなるように一人一人が出来ることをしよう。」という言葉を信じ、短い期間の中でもチームが少しずつまとまっていったと思います。特に今大会では東アジア選手権大会での経験がより一層チームを奮い立たせていたと思います。例えばゴールに向かう姿勢や、試合中の波を出来るだけ小さくすること等、学んだ事や経験をそれぞれ意識してプレーしたことがチームの成長に繋がったのだと思います。

宿敵韓国・打倒韓国と意気込んでいた最終戦、結果29対30と1点差で敗北しました。今回の韓国戦では大会を終えた今でも鮮明に情景が思い浮び、また、言葉で語れないほどの貴重な経験となりました。勝負の世界では惜しいという言葉は通用せず、負けは負けと白黒はっきりしてしまうのが勝負の世界であると思います。この1点差の敗北には大きな価値があり、分岐点でもあると思います。いい方向へと進んでいけるようこの経験を無駄にせず更なる精進をしていきたいと思います。

今大会も多くの方に支えていただき素晴らしい環境の中で存分にプレーすることが出来ました。本当にありがとうございました。

帯同報告　U-20女子日本代表トレーナー　岩谷 美菜子

この度は女子ジュニアアジア選手権に帯同という貴重な経験をさせて頂いた事を心より御礼申し上げます。

開催地であるカザフスタンは事前の情報より、現地の水が原因で下痢になる選手が多いと予測されましたのでドクターには下痢止めや整腸剤・点滴を多めに準備して対応して頂きました。ホテルでの食事におきましても生野菜などは初日・2日目はスタッフのみで食べ、食中毒などの問題がないと判断してから選手には食べてもらうようにしました。練習・試合時の飲料水は、大会側が準備した水が硬水だったため、軟水を購入して対応しました。それでも下痢や体調不良になってしまい体重が減ってしまう選手が出たため、持参したお米をおにぎりやレトルトで補食としてとる事で体重維持に努めました。今回選ばれた16名の選手はユース等を経験して、遠征慣れしている選手も多く、コンディショニングの維持やセルフケアを積極的に実施しました。



今回参加したU-20の選手たちは2019年に熊本で開催されます女子世界選手権、そして2020年の東京オリンピックにおいて中心となっていく選手です。今大会では韓国にあと1点という所で敗れてしまいましたが、来年のジュニア世界選手権やこれらの大会で好成績をおさめるため、個人のスキルアップはもちろん、世界と戦える身体作り・食育への取り組みが必要ではないかと痛感しました。

戦評

■8月7日（金）

日本　35（15-12、20-9）21　イラン

日本は、左サイド團、左45°河原畑、センター斗米、右45°高杉、右サイド藤田、ポスト青でスタート。ディフェンスでは伊地知が斗米に代わってセンターバックに入った。序盤は硬さの見える日本。開始早々、7m、サイド、速攻などシュートチャンスを連続でつくるものの、シュートミスが続いた。前半5分、高杉のミドルシュートを皮切りに、河原畑、再び高杉のミドルシュートで連続得点。また、相手のミスを、伊地知、青、團、藤田らが速攻につなげ、15分には10対4とリードを広げた。その後、日本はセットオフェンスでシュートミスが続く。一方、イランはエースAfshariのミドルシュート、サイドChahardangiの活躍、さらにゴール付近のリバウンドボールを得点につなげた。前半のスコアは15対12、日本がイランに追い上げられて終了した。

後半、日本は防御で相手のミスを誘い、伊地知、河原畑らが速攻で連続得点。GK神谷の好セーブもあり、21対13と点差を広げた。後半10分まで得点できないイランは、中央ディフェンダー伊地知、青らの退場時に追い上げるものの、その後はプレッシャーのかかった状況でディスタンスシュートを打たせられる展開に。「守って速攻」のリズムが出た日本は、團、伊地知、河原畑らの速攻で加点。セットオフェンスでは、左45°に青が入り、ミドルシュートで得点。さらに、残り10分、エースを守りに入ったディフェンダー三橋の活躍で、イランにシュートチャンスを与えることなく、最終スコア35対21で勝利を収めた。

［個人得点］伊地知：9点、河原畑：7点、團・青：5点、高杉：3点、藤田：2点、三橋・斗米・眞方・登川：1点

■8月8日（土）

日本　33（17-12、16-13）25　中国

日本のスタートメンバーは、左サイド團、左45°河原畑、センター斗米、右45°高杉、右サイド藤田、ポスト青、GK神谷、ディフェンスでは斗米に代わって伊地知が中央を守る。試合序盤、ディフェンスで動きのよい日本。中国にシュートチャンスを与えない。相手のミスが出たところを團が速攻で7mTを獲得。青が落ち着いて7mTを決めると、伊地知が速攻で得点、團が再び7mTを獲得。セットオフェンスでは中国の3-2-1防御に対して斗米のゲームメイクからポスト青、團のサイド、河原畑のミドルなど連続得点。開始10分、日本ペースを止めようと中国がタイムアウトをとる。しかしながら、その後も日本の勢いは止まらず、中国のミスから伊地知が速攻で2点連取。接触が非常に荒い中国に対し、伊地知の相手を退場させる好プレーで日本は数的有利の時間帯を迎える。その時間帯に、團が連続得点、一気に点差を広げた。20分以降、中国はエース15番を中心とした強い個人技で加点、日本はポストを利用した攻めでバランスよく得点を重ね、前半を17対12で終えた。

後半に入ると、ディフェンスで高杉が相手のミスを誘発し、自ら速攻で2点連取。よいスタートを切ったかと思われたが、その後、セットオフェンスでのミスが続く。浮き足立った日本。ディフェンスでは、前に詰め遅れて中国にディスタンスシュートを連続で決められる。点差が3点につめられた8分、日本がタイムアウトを請求。その後、河原畑がミドルシュートを決め、悪い流れを断ち切る。落ち着きを取り戻した日本は中国のエース15番にマークを集中させ、15番に得点を許さない。オフェンスではポスト青、斗米、河原畑らが相手の退場を誘い、日本にとって数的有利な時間帯が続く。青はこの日、7本の7mをすべて決める大活躍。数的不利の状況で攻め手のない中国はタイムアウトを請求するも修正できず、15分以降加点できない。一方、日本は中国のミスを伊地知、藤田らが速攻につなげ中国を引き離した。最終スコア33対25で中国に勝利した。

［個人得点］青：10点、團・伊地知：7点、藤田・高杉・河原畑：3点

■8月10日（月）

日本　31（15-16、16-10）26　カザフスタン

日本のスタートは、左サイド團、左45°河原畑、センター斗米、右45°高杉、右サイド藤田、ポスト青、GK神谷。カザフスタンはフル代表を経験している大型ポストAbdikhamit、シュート力・突破力ともに非常に優れている左45° Khardinaそして右45° Abildaらが攻撃の中心。防御では長身プレーヤーをトップに据えた5:1防御。先制点は日本。相手のミスを團が速攻につなげた。続いて、河原畑がカットインで7mTを2本獲得。それらを青、藤田が決める。神谷と交代したGK中野がカザフスタンの絶好の得点チャンスに好セーブを連発。それを伊地知が速攻に繋げる。また、斗米のゲームメイクから團、藤田らがサイドから得点。前半10分5対4で日本がリード。バランスよく点をとる日本に対し、カザフスタンはエースKhardinaで4得点。15分過ぎから河原畑がミドルシュート、カットインで3連続得点。11対8と日本がリードした19分にカザフスタンがタイムアウトを請求。タイムアウト後、日本はエースKhardinaにマンツーマンを仕掛けるが、Abildaの1対1から防御が崩され、23分には13対13の同点。日本は藤田のサイドシュートで得点するものの、カザフスタンAbildaの活躍で24分に13対14と逆転される。その後、日本は藤田のサイドシュート、青のポストシュートで15対15と同点にするものの、前半終了2秒前にエースKhardinaにディスタンスシュートを決められ、前半を15対16で終える。

後半、日本は常時カザフスタンのエースKhardinaにマンツーマン防御を仕掛ける。カザフスタンは大型ポストAbdikhamitを利用しようとするが、青、伊地知らがポストにボールを入れさせない。そして、GK中野の好セーブから伊地知、藤田らが速攻で得点。開始3分で18対17と逆転する。そこから、カザフスタンはAbildaが1対1から連続得点。7分、カザフスタンの絶好の得点チャンスを中野が再び好セーブ。中野はこの日、ポストやサイドといった6m付近のシュート阻止率44%の大活躍。中野の活躍により波に乗った日本は、河原畑のミドルシュート、團のサイドシュート、高杉の速攻で連続得点。22対19と3点差までリードを広げた。しかし、この後、日本は積極的にシュートを狙いにいくものの、チャージングなどのミスが連続。その間に、大型ポストAbdikhamit、エースKhardinaに得点され、22対21と1点差まで詰め寄られる。しかし、ここから斗米が落ち着いてゲームメイク。河原畑が獲得した7mTを藤田が決めると、高杉がカットインシュート、河原畑がミドルシュート、藤田、團らがサイドから決め29対23と一気に点差を広げた。防御ではカザフスタンのシュートをGK中野が再三跳ね返し、得点を許さなかった。最終スコア31対26でカザフスタンに勝利を収めた。

［個人得点］藤田：10点、團・河原畑：6点、高杉・伊地知：3点、青：2点、三橋：1点

戦　評

■8月13日（木）

日本　39（25-13、14-6）19　ウズベキスタン

日本のスタートは、左サイド園、左45°河原畑、センター斗米、右45°高杉、右サイド藤田、ポスト青、GK中野。防御では斗米に代わって眞方がウズベキスタンの左45° Erkinovaを守る。ウズベキスタンのスローオフから試合開始。ウズベキスタンのミスから園が速攻で7mスローを獲得。青が決めて日本が先制得点。対するウズベキスタンは得点源の右45° Abdulhamidovaがカットインから得点。ウズベキスタンが河原畑に対して前へ出て守ろうとするのに対して、広くなった中央のスペースを斗米がカットインから得点。防御ではGK中野がサイドやカットインシュートを好セーブし、園、高杉、藤田らが速攻につなげた。ウズベキスタンはErkinova、Abdulhamidovaらバックコートプレーヤーがカットインやミドルシュートで得点するがミスを抑えることができない。相手のミスを確実に速攻に繋げ、セットオフェンスではサイド園、センター斗米らの活躍で日本が12対8とリード。15分、ウズベキスタンがタイムアウトを請求。タイムアウト後も園が速攻で2連取。前半の残り10分間、藤田、園、眞方らが速攻で一気に畳み掛け、25対13で前半を終了した。

後半は、ポストに高杉、右45°に澤井が入る。後半に入り、低めの3-2-1防御を仕掛けるウズベキスタン。右45°澤井が防御の間からミドルシュート決めると、園が速攻、河原畑がカットイン、眞方が速攻で4連取。後半に入り、ミスが目立つウズベキスタン。後半16分にウズベキスタンはタイムアウトを申請するが、ミスを減らすことができない。その後、日本は左45°本間のカットイン、登川のミドルで得点。さらに、斗米、登川らが相手の退場を誘い、一時は6対4の状況に。終始、相手のミスを速攻に繋げた日本は、最終スコア39対19で勝利を収めた。

[個人得点]：園：10点、眞方：7点、河原畑・斗米：5点、藤田・高杉：3点、青：2点、山口・本間・澤井・登川：1点

■8月14日（金）

日本　29（17-14、12-16）30　韓国

日本のスタートメンバーは左サイド園、左45°河原畑、センター斗米、右45°高杉、右サイド藤田、ポスト青、GK中野。防御では斗米に代わって眞方。今大会、これまで韓国は常に3：2：1防御で攻撃のミスを誘い、速攻で大量得点をしている。日本に対しても韓国は3-2-1防御でスタート。先制点は日本。河原畑が豪快にミドルシュートを打ち込んだ。その後、日本はシュートチャンスを作るが決めきることができず、韓国がポストシュート、速攻、右45°の長身エースPark Junheeのロングシュートで3連取。勢いに乗る韓国に、藤田、園らサイド陣の速攻で3対4と離されずについていく。韓国に対して、ライン際を厚く守り、ディスタンスシュートを打たせて守りたい日本だが、右45° Park Junheeのロングシュートを止めることができない。前半15分まで、日本はダブルポストに移行して韓国のマークミスを誘いながら河原畑、斗米のミドルシュート、藤田のカットインシュートなどで9対8。韓国はタイムアウトを請求し、3-2-1防御から6-0防御に切り替えた。タイムアウト後、韓国が7mスローを獲得すると、GK岩見がナイスセーブ。慌てた韓国のミスを眞方が速攻に繋げて11対9。そこから点の取り合いが続くが、ラスト2分、斗米が中央からカットインシュート、続いて、藤田が相手の退場を誘うプレーで7mを獲得、その7mスローを青が決め、最後に、眞方が防御に隙をついて右45°からミドルシュートで3連取。前半17対14と日本が3点リードで折り返した。

後半は眞方が右45°、高杉がポストに。後半開始10分まで日本は眞方のミドルシュート1点のみ。その間、韓国はPark Junhee、Hur Youjinのディスタンスシュートで得点し、9分には韓国が逆転。悪い流れが続いた日本だが、10分以降は、斗米のゲームメイクから藤田のカットイン、河原畑、斗米らのミドル、園の速攻で点差を離されることなく粘り強くついていく。20分過ぎ、藤田が再び相手の退場を誘い7mスローを獲得。青が決めて24対25。日本にとって数的有利の絶好のチャンスだったが、韓国のポストGim Boeunに得点され24対26。日本はシュートチャンスを作るものの決めきることができない。そして、韓国の左45° Hur Youjinにミドルシュートを打ち込まれラスト5分で24対27。諦めない日本。眞方が獲得した7mスローを青が決めると、河原畑がミドルシュートを決めて26対27。ここで韓国がタイムアウトを請求。その後、ポストGim Boeunに決められて26対28。すかさず、河原畑が割って入って相手の退場を誘い、7mスローを獲得。青が決めて再び1点差、27対28。残り時間は2分。防御で粘った日本だが、Kim Dayoungに押し込まれて27対29。残り1分10秒で日本はタイムアウトを要求。数的有利の状況で、サイドから園が決めて28対29、残り50秒。浮き足立つ韓国にミスが出たところで速攻に向かった日本だったが、審判はフリースローの判定。左サイドから韓国が得点し28対30。すぐに、河原畑がカットインで1点差に戻す。残り15秒。センターライン付近で韓国を守り、ボールを奪った日本だったがタイムアップの笛が鳴り、29対30で韓国に惜敗した。

[個人得点]：河原畑：7点、園・青：5点、藤田・斗米・眞方：4点

高松宮記念杯　平成 27 年度全国高等学校総合体育大会

第66回 全日本高等学校選手権大会



期日：平成 27 年 8 月 1 日(土)～8 月 7 日(金)
会場：堺市金岡公園体育館、堺市家原大池体育館、堺市立大浜体育館、堺市原池公園体育館、堺市立初芝体育館

男子：県立藤代紫水は初優勝！

女子：県立高松商業は２年ぶり３回目の優勝！

■最終順位
［男子］
優　勝：県立藤代紫水（茨城県）
準優勝：法政大学第二（神奈川県）
3　位：北陸（福井県）
浦和学院（埼玉県）
［女子］
優　勝：県立高松商業（香川県）
準優勝：四天王寺（大阪府）
3　位：佼成学園女子（東京都）
県立玉野光南（岡山県）

平成27年度インターハイを終えて

大阪高等学校体育連盟ハンドボール専門部委員長　佐々木 昌弘

平成 27 年度全国高等学校総合体育大会兼高松宮記念杯第 66 回全日本高等学校ハンドボール選手権大会を無事に終了することができました。まず、本大会開催にあたり、ご支援、ご協力をいただいた多くの皆様、そして素晴らしい試合を展開してくださいました選手・監督・審判員の皆様に感謝を申し上げます。

本年度の全国高等学校総合体育大会は「風になれ今青春が走りだす」の大会スローガンのもと「2015 君が創る近畿総体」を大会愛称に近畿２府４県で開催されました。ハンドボール競技は堺市金岡公園体育館をメイン会場として堺市の体育館５会場６コートを使用して８月１日の開会式から８月７日の決勝戦・閉会式までの７日間の開催となりました。

準備につきましては、平成 18 年度に同じ会場で「06 総体 THE 近畿」ハンドボール競技を開催し、また佐賀インターハイ、神奈川インターハイを視察させていただきましたのでスムーズに大会準備を進めてまいりました。会場はすべて空調設備、サブアリーナが整い、良好な試合環境を提供できたのではないかと思っています。また、医師、看護師の配置に加えて、選手および審判員のケア、サポートや救急対応のために、森ノ宮医療学園専門学校のご協力のもとに、サポートブースを設置することもできました。

競技運営に関しましては、（公財）日本ハンドボール協会、（公財）全国高体連ハンドボール専門部と協議し、TD と両レフェリー間のインカムの使用、オフィシャルパドルの導入を行いました。また、地元のオフィシャル研修を重ね、大会前日の TD、審判研修会でも入念に打ち合わせを行いました。特に競技委員長の北中弘規先生、審判長の島村浩信先生には丁寧にご指導をいただき正確な競技運営に努めることができました。

開会式は堺市金岡公園体育館メインアリーナを使用し、コンパクトながらも選手全員に参加していただきました。大型スクリーンを使用して臨場感を出すとともに、高校日本一の箕面自由学園高等学校ゴールデンベアーズのチアリーダー部に素晴らしいアトラクションを披露していただき、大会の開





■優秀選手

［男子］	［女子］
滝川　潤（県立藤代紫水）	澤田のどか（県立高松商業）
松岡寛尚（県立藤代紫水）	谷　栞里（県立高松商業）
鈴木幸弥（県立藤代紫水）	内堀杏美（県立高松商業）
中村　光（県立藤代紫水）	冨岡佑貴（県立高松商業）
山田暁央（法政大学第二）	川﨑真帆（四天王寺）
中川翔太（法政大学第二）	前田みのり（四天王寺）
吉田駿介（法政大学第二）	土居佳加（四天王寺）
大橋　要（北陸）	初見実椰子（佼成学園女子）
川﨑　駿（北陸）	金城ありさ（佼成学園女子）
関根源哉（浦和学院）	葛原佳那（県立玉野光南）
山本祐輝（浦和学院）	秋山静香（県立玉野光南）
山本晃大（県立大分雄城台）	関川美咲（県立不来方）
小林聖弥（駿台甲府）	グレイ クレア フランシス（横浜創英）
羽諸大雅（市川）	横田未来（高水）
前園将至（大体大浪商）	渡部真綾（小松市立）

始を盛り上げることができました。

8月2日からの試合では、趣向を凝らした応援、満員の観衆で盛り上がる中、白熱した試合が数多く展開されました。メイン会場の堺市金岡公園体育館でのオープニングゲームは岩手県代表不来方対地元大阪府代表の桃山学院の対戦となり、一進一退の好ゲームが展開され、延長の末１点差で地元大阪の桃山学院が勝利し、会場は大いに盛り上がりました。大会を通じて３点差以内で勝敗が決定する試合が 22 試合と僅差の好ゲームが続出し、特に、男女準決勝４試合では浦和学院対法政大学第二、佼成学園女子対四天王寺の２試合が延長戦、高松商業対玉野光南戦が１点差、北陸対藤代紫水戦が２点差と、どの試合も紙一重の差で勝敗が決する素晴らしいゲームとなりました

最終日の決勝戦、女子は春の全国選抜大会３位同士の香川県代表高松商業対地元大阪府代表四天王寺の対戦、男子は茨城県代表藤代紫水対神奈川県代表法政大学第二の関東同士の対戦となりました。女子決勝戦は両チームともに堅いディフェンスからの速攻と GK のファインセーブの連続で一進一退のゲーム展開となりましたが、17 対 16 の１点差で高松商業が勝利し、2 年ぶり３回目の優勝の栄冠を獲得しました。地元の大声援を受けながら最後の一秒まで諦めることなく戦い続け、惜しくも準優勝となった四天王寺にも惜しみない拍手が送られました。男子決勝戦は序盤の法政第二のリードを前半中盤に藤代紫水が堅いディフェンスからの速攻で逆転し、その後、互角の見ごたえのある攻防が続き前半を終えました。後半も緊迫した展開が続きましたが、後半中盤から藤代紫水の GK の好セーブと速攻からの思い切ったシュートが次々と決まり、藤代紫水が見事に初優勝を遂げました。

大会を終えるに当たり、多大なご支援、ご指導を受け賜った（公財）日本ハンドボール協会、全国高体連ハンドボール専門部、大阪ハンドボール協会、堺ハンドボール連盟の皆様に感謝を申し上げるとともに、早朝から夜遅くまで献身的に働いてくださいました大阪の役員の皆様、笑顔を絶やさずひたむきに役割を果たしてくれた高校生補助員の皆さん、そして３年間、高校総体準備室で大会準備に労をいとわず、私と共に働いてくださいました大阪府総体実行委員会の皆様にあらためてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

男子優勝 県立藤代紫水高等学校（茨城県）

悲願の優勝～おかげさまで～

県立藤代紫水高等学校ハンドボール部監督　滝川 一徳

リードを広げて迎えた残り時間２分、主将であり息子の潤が退場しベンチに。「よく頑張ったな」「はい」。涙が止まりませんでした。

おかげさまを持ちましてインターハイで優勝することができました。前任の伊奈高校は決勝に進出した３回とも優勝。紫水では過去３回の決勝戦ですべて敗れ、悔しい思いをしてきました。大阪・堺で迎えた今大会。９年前のインターハイもこの堺市が会場でした。その年は、春の全国選抜で優勝しながら興南高校に敗れ準優勝。そこから決勝戦３連敗。その時の主将が日本代表チームの合宿で私がチームを離れる時間が増えた中、しっかりと指導してくれた小倉コーチでした。決勝で敗れるシーンを２年続けて見てきた当時小学３年生だった息子の思い、小倉コーチの思い、悔しい思いをしてきた卒業生や保護者、苦しい時期を支えて下さった多くの方々の悲願であった「インターハイ優勝」。選手はもちろん、合宿や遠征でお世話になった先生方、陰に陽に支えて下さった皆様方に感謝の気持ちでいっぱいです。

「９年前の忘れ物を獲りに来た」選手には大会中、このことを何度も伝えました。この忘れ物を選手は必死になって獲ってくれました。どの試合も苦しい場面がありましたが、選手は自分たちの積み上げてきたものを信じ、粘り強く、がむしゃらに、ひたむきに、心一つに戦ってくれました。2012年アジアユースで世界選手権の切符を獲って以来、たくさんのご教示を頂いている近森団長がインターハイ約２週間前、私が代表チームの合宿でチームを留守にしている間、練習に来て下さり、選手と寝食を共にしてご指導頂きました。恩師の日体大松井先生も大阪まで来て下さりアドバイスを下さいました。９年前の保護者が大応援団を結成し、大会序盤を勢いづけて下さいました。決勝前夜に届いた多くの卒業生からのメール。試合後鳴り止まない電話やメールの数々。夜遅くに帰校した際、出迎えて下さったOBやその保護者、伊奈高校の卒業生。人に恵まれ、選手に恵まれ、そして親として何もしてあげられなかった息子に最高の親孝行をしてもらいました。あらためて思いが一つになることがどれだけ大切か、一つのことを成し遂げるためにはどれだけの支えがあるかを感じることができました。

これからもこの優勝から改めて学んだ「人との出会いを大切に」「感謝の気持ちを忘れずに」を心に刻んで精進していきたいと思います。そして、11月のオリンピック男子アジア予選まで日頃選手に向けて言っている「苦しい時こそ頑張る」を自分自身に言い聞かせ、支えて下さった多くの方々に恩返しできるよう頑張ります。今後ともご指導ご鞭撻の程、宜しくお願い致します。

最後になりますが、最高の舞台を整えて下さったインターハイ実行委員会の皆様、ボランティアの高校生の皆様はじめ関係各位に御礼申し上げます。

「一生忘れることのできない思い出をありがとうございました」

インターハイ優勝

県立藤代紫水高等学校ハンドボール部主将　滝川　潤

おかげさまでインターハイ初優勝をすることができました。いつも応援して下さった学校の先生方、紫水・伊奈のOBの皆さんと保護者の方々、そして苦楽を共に戦ってくれたチームメイトに心から感謝しています。

今年３月、全国選抜大会準々決勝の北陸戦でエース松岡が失格になり、２点差で敗れました。しかしその敗戦は「夏のインターハイで絶対にリベンジをするんだ」という強い気持ちにさせてくれた敗戦でした。



4月から監督である滝川先生が日本代表コーチになりチームを離れる時間が多くなりました。しかしそのような状況でもコーチの小倉先生が熱心に指導して下さり、また紫水OBの先輩方や伊奈高OBの方々も練習に来ていただき、近森さんをはじめ、たくさんの方々も私たちに携わって下さいました。私たちもこのような状況だからこそ、「自立した選手になろう」とチーム一丸となって必死に練習に励みました。苦しい時期もありましたが、インターハイが近づくにつれ3年生全員が強いリーダーシップでチームをまとめてくれ、それに1・2年生もしっかりついてくる形で段々とチーム状態もよくなり、今年のチームの1番の持ち味である「まとまり」で苦しい時期を乗り越えることができました。

大会では初戦から強豪チームが相手で厳しい戦いが続きましたが、苦しい時にチーム全員がまとまり、試合に出ている選手が応援してくれた仲間の気持ちを背負い、一つになって戦えたことが優勝という最高の結果につながったと思っています。また、仲間のおかげで優秀選手賞も頂くことができ、とても光栄に思うと共に、熱心に指導して下さった監督・コーチをはじめ、苦しい時に声を掛け合い、励まし合い、支え合ってきたチームメイト全員に感謝の気持ちでいっぱいです。そして今まで悔しい思いをしてきた卒業生や保護者、応援して下さった多くの方々の悲願であった「インターハイ優勝」を、自分がキャプテンの今年成し遂げることができ、監督である父を胴上げすることができたことをとても嬉しく思います。

最後に、今回の優勝にあたり日頃から私たちを支えて下さった保護者の方々、会場に足を運んで下さった紫水・伊奈の卒業生とその保護者の方々、熱いご声援を本当にありがとうございました。これからも「苦しい時こそ頑張る」を胸に夢や希望そして感動を与えることができる選手、チームを目指して努力していきます。今後とも温かいご指導、ご声援をよろしくお願いします。

女子優勝 県立高松商業高等学校（香川県）

インターハイを振り返って

県立高松商業高等学校ハンドボール部 澤田 のどか

始めに、平成27年度第66回全日本高等学校ハンドボール選手権大会の開催、運営に携わっていただいた、関係者の方々に感謝申し上げます。

組み合わせが発表された時、「厳しい、勝ちあがるのは難しい」と感じました。しかし、高松商業のスタイルである守って速攻を十分に発揮することができ、勝ち進むことができました。

振り返ると、大会は順調に勝てるだけではありませんでした。準決勝、決勝と自分達のスタイルの守って速攻は簡単には通用しませんでした。点数も中々伸びず、苦しい時間帯もありましたが、そこで焦らず、60分後を見据え、DFから走ることをやめることなく、粘り強く戦いました。その結果、接戦の末、勝利をつかみ取ることができました。決勝戦の最後のブザーが鳴った時、優勝した実感はありませんでしたが、不思議と涙が止まりませんでした。

最後になりましたが、今回の大会で優勝できたのは多くの方々の支えがあったからです。練習試合に応じてくださった実業団及び、大学の選手の方々、各高校の指導者の方々に感謝を伝えたいと思います。そして、毎日の練習場所を提供してくださっている㈱マキタの御温情には感謝の念に堪えません。また、後援会をはじめ、様々な場面で応援してくださった方々、保護者会の皆様に感謝します。そして、共に練習に励んだ仲間のみんなに「本当にありがとう」と伝えたいです。

これから国民体育大会を控えています。インターハイと同じく一戦一戦を悔いのないよう、すべてを自分達の力に変えて挑みたいと思います。高松商業ハンドボール部員一丸となって、さらに練習に励みたいと思います。



戦評

男子

▼準決勝

北陸（福井） 33（18－12、15－19）31 藤代紫水（茨城）

両チームとも体格を活かした堅いディフェンスからスピード豊かな速攻が持ち味のチームである。北陸は二村を中心とする速攻と大橋、山川のロングで得点する。藤代紫水はGK中村の好セーブと松岡、青山のロングシュート、鈴木のサイドシュートで対抗する。前半6分藤代紫水の3連続得点で4対1の3点差からは17分まで互角の攻防が続くが、18分から藤代紫水が3度の連続得点でリードを広げ18対12の6点差で前半を終える。

後半開始4分藤代紫水の連続ファウルによる退場の間に北陸は田中、二村を中心に速攻で3点差に詰め寄り、後半10分再度藤代紫水に退場者が出た間に4連続得点をあげ1点差とする。北陸は15分藤代紫水の3人目の退場をきっかけに20分に逆転し、その後一進一退の攻防が続いたが、26分松岡、青山の3連続得点で藤代紫水が北陸を突き放し、33対31で勝利をおさめ決勝に進出した。



法政第二（神奈川） 38（19－20、15－14）37 浦和学院（埼玉）
（0－1 延長 4－2）

開始早々、浦和学院関根のシュートで幕を開けた準決勝戦、法政二も山田のシュートで取り返す。両チーム関根、山田を中心に互角の試合展開となる。14分法政二は3連続得点で2点リードするが、浦和学院も24分から4連続得点をあげ前半は20対19の浦和学院1点リードで終了する。

後半法政二は山田の絶妙なパスフェイントからのシュートですぐに同点とするが、浦和学院は長身のポスト高野にボールを集めた攻撃で再びリードを奪う。その後、一進一退の見ごたえのある攻防が続き、お互いに一歩も譲らず延長戦に突入する。延長戦、浦和学院は法政二山田にマンツーマンディフェンスをとり前半1点リードで延長前半を終える。延長後半、法政二は藤田のサイドシュートで逆転し、浦和学院山本のシュートで追い付かれるが、ラスト18秒再び藤田が決勝点をあげ接戦に勝利した。



▼決勝

藤代紫水（茨城） 39（16－14、23－13）27 法政第二（神奈川）

試合序盤、法政二の高いディフェンスが機能し、山田を中心に6連取するが、藤代紫水は徐々に法政二のディフェンスに対応し、滝川のポストプレー、松岡のミドルシュートを軸に前半17分に同点に追いつく。その後、たがいにリードを奪うが、突き放すことはできずに互角の展開のまま、16対14と藤代紫水の2点リードで前半を終える。



藤代紫水は後半開始より、速攻と滝川のポストシュートで連続得点し、後半6分に21対15と6点のリードを奪う。法政二はタイムアウトを取りディフェンスを5-1に切り替えリズムを取り戻そうとするが、藤代紫水GK中村の好セーブに拒まれ、得点を伸ばすことができない。その後も藤代紫水の堅いディフェンスからの速攻が連続して決まり、後半20分に10点差となる。法政二は山田、中川、佐竹を中心に追い上げるが、藤代紫水は青山のロングシュート、仲永の速攻で得点を重ね39対27で勝利し、初優勝の栄冠を飾った。



戦評

女子

▼準決勝

四天王寺（大阪） 28（12−9、10−13）26 佼成学園女子（東京）
（2−2 延長 4−2）

佼成学園吉田のカットインシュート、四天王寺西村のポストシュートで試合が動き出した。四天王寺はGK川﨑からの素晴らしいロングパスからの速攻、吉岡のポストシュートなどで6連続得点し5点差とする。佼成学園はGKの好セーブ、金城のミドルシュートで追い上げ、前半3点差で折り返す。



後半佼成学園はディフェンスラインをやや下げて四天王寺のオフェンスに対応し、攻撃では吉田、金城のミドルシュートで開始5分に同点に追いつく。その後佼成学園のディフェンスに四天王寺がリズムをつかめない間に、金城のミドルシュートを中心に得点を重ね、23分佼成学園のリードが3点となる。四天王寺は川﨑の好セーブの連続から川上の素晴らしい速攻で反撃し、4連続得点で27分に逆転する。28分に同点に追いついた佼成学園が残り40秒に金城のシュートで1点リードし、試合が決まったかと思えたが、タイムアップ寸前、諦めずに走った四天王寺土居にボールが渡り同点ゴールで延長戦となる。延長前半は両チームとも2点連取し、同点で延長後半となる。後半開始、四天王寺は吉岡、西村のポストプレーで佼成学園のディフェンスを崩し3連取し、佼成学園を振り切り28対26で勝利を手に入れた。

高松商業（香川） 22（10−9、12−12）21 玉野光南（岡山）

試合開始直後は両チームともリズムがつかめずにパスミスが多く、3分に玉野光南がポストシュートで得点し試合が動き出した。



高松商業は速攻と谷のミドルシュート、玉野光南は秋山のロングシュートとよく訓練されたポストとの2対2が攻撃の中心である。前半、高松商業は玉野光南のポストプレーに対応が遅れリズムに乗れなかったが、15分過ぎから速攻が出るようになり、25分に3点のリードを奪う。高松商業のペースになるかと思われたが、玉野光南秋山の連続得点により10対9の1点差で前半を終える。

後半も速攻対ポストプレーという互角の展開が続いたが、高松商業は谷のミドルが決まりだし16分再び3点のリードとする。玉野光南はタイムアウトをとり、粘り強い攻撃と、GKのファインセーブで23分同点に追いつくが、終盤に谷が連続して得点し、高松商業が粘る玉野光南を振り切り勝利し、決勝戦に進出した。

▼決勝

高松商業（香川） 17（9−8、8−8）16 四天王寺（大阪）

開始早々四天王寺がパスカットからの速攻で連続得点しリードするが、高松商は谷のミドルシュート、内堀のポストシュートで追いついた。四天王寺は山口のロングシュート、吉岡のサイドシュートでリードするも、高松商業は谷の連続3得点で9対8と逆転し前半を終える。



後半早々四天王寺は川上、土居の得点で逆転、GK川﨑の素晴らしいセーブの連続もあり、14分に2点リードとするが、高松商業は中條、谷の得点で23分に再度逆転する。四天王寺も山口のシュートで24分に16対16の同点に追いついたが、高松商業はGK冨岡の好セーブと堅いディフェンスでその後6分間を守り抜き、27分澤田のポストシュートで決勝点を奪い17対16で勝利し、2年ぶり3度目の優勝の栄冠に輝いた。



第28回 全国小学生ハンドボール大会

最終順位

■男子

優　勝：神森小学校ハンドボールクラブ（沖縄県）
準優勝：東海ハンドボールスクール（愛知県）
3　位：上庄ハンドボールクラブ（富山県）
4　位：玉名町小学校（熊本県）

■女子

優　勝：三郷ハンドボールクラブ（埼玉県）
準優勝：東海ハンドボールスクール（愛知県）
3　位：HC 宮田（富山県）
4　位：草内小学校ハンドボールクラブ（京都府）

開催期日：平成 27 年 7 月 30 日（木）～ 8 月 2 日（日）
会　　場：京田辺市田辺中央体育館
　　　　　同志社大学デイヴィス記念館

総　評

（公財）日本ハンドボール協会小学生専門委員長　山本　繁

7 月 30 日（木）から 8 月 2 日（日）まで、今年も京田辺市において「第 28 回全国小学生ハンドボール大会」が開催されました。全国から男子 37 チーム（昨年比＋ 2)、女子 35 チーム（昨年比＋ 2）が都道府県代表として参加し、熱戦を繰り広げました。今年も京都は猛暑でしたが､試合会場はそれ以上に熱いプレーで盛り上がりました。今年は久々に山形県の男子チームも出場し、北海道は初めて釧路のチームがアベック出場し、全国各地の小学生チームがハンドボールを通して交流するすばらしい大会となりました。

しかし、年々猛暑となるこの時期の体育館の環境について、今後対策を考えていかなくてはならず、来年の課題となりました。

今年から『J クイックハンドボール』がスタートし､攻防がよりスピーディーでアクティブなゲーム展開となりました。開会式の前の U-12NTS 講習会では、『J クイックハンドボール』の趣旨をより理解していただくために、①スローイングの基礎と激しいフットワーク、②積極的なディフェンスとそれに対応したオフェンスについて研修を深めました。

優勝は、男子が神森小学校ハンドボールクラブ（沖縄県 11 年ぶり 4 度目)。東海 HS（愛知県）の 3 連覇はなりませんでした。女子は三郷ハンドボールクラブ（埼玉県）が悲願の初優勝を飾りました。関東勢の女子チームの優勝も初めてです。

男子優勝　神森小学校ハンドボールクラブ（沖縄県）

神森小学校ハンドボールクラブ監督　翁長 誠光

11 年ぶり 4 度目の全国大会優勝

昨年は、女子チームが 10 年ぶりの全国大会優勝でした。昨年は男子・女子チームアベックで全国大会出場を目指して日々練習を積み重ねて 10 年ぶりのアベック全国大会優勝を目標に取り組みました。しかし乍ら、男子チームは全国大会県予選で惜敗し、出場を逃してしまいました。その悔しさをバネに、昨年 12 月九州小学生親善大会を優勝し、今年 1 月には愛知県に遠征し、東海 HC さんを始め近隣の他府県のチームと交流試合を行い、沢山のチーム指導者並びに関係者からご指導を頂く事ができました。4 月新チーム結成後も、神森中学校 1 年生の男子チームや昨年の神森小学校優勝 OG の協力も頂きながら練習試合を重ねる事が出来ました。

今年のチームは、大会会場入り後も各チームから『今年の神森は優勝候補ですね』と前評判が先行し、私も子供たちも試合前から異様なプレッシャーを感じながらの大会でした。流石に、初戦は子供たちがガチガチに緊張していることが分かるような試合内容でした。宿舎に帰って、全員ミーティングでは次戦の対策を子供たちから沢山の意見がでました。私たちスタッフもあれこれと意見交換しました



が、翌日スッキリしないまま会場入りしました。子供たちが楽しそうにアップしているのを目の当たりにし…『ピーン』と閃き…あまり難しく考えずに、神森小学校のモットーである『守って速攻』の王道を貫こうと選手・スタッフと確認し、本大会を楽しむ事が出来たと思慮します。特に、準決勝の上庄 HC 戦・決勝の東海 HC さんは、スタッフ並びに選手間とは親近感があり、それぞれの持ち味があって互いに最高のプレーが出来たと思慮します。試合終了後の選手間の精一杯やった感の互いを称えあう握手を見ているとスポーツの素晴らしさを痛感しました。これからもエンジョイハンドボールで神森小学校の伝統を後輩たちに引き継ぎながら、ハンドボールの普及と底辺拡大に微力ながらも関わっていきたいと思います。

今年も素晴らしい全国小学生ハンドボール大会を開催頂きありがとうございました。大会に参加するたびに参加チーム数が増えて沢山のチームと交流できる事に感謝することと日本ハンドボール協会・京都府ハンドボール協会他沢山のスタッフの方々に心より御礼申し上げます。又、子供たちの一番の理解者でいつも見守って下さった父母会の皆さん、全国大会出場にあたり、ご支援頂いた沖縄県ハンドボール協会・㈱沖縄プラント工業・浦添市・神森小学校・地域の皆さん他沢山の方々に心より感謝とお礼申し上げます。ありがとうございました。

選手の声



No. 1
嵩西颯斗
決勝戦ではたくさんとめる事ができたので良かったです。



No. 2
津波古和登
よっしゃー！
全国制覇！！



No. 3
伊禮颯雅
監督、コーチ、父母そして仲間に感謝しています。



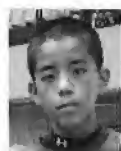
No. 4
具志堅愁真
日頃支えてくれた方々のおかげで優勝できたと思う。九州制覇に向け、チームに貢献できる様に頑張りたい。



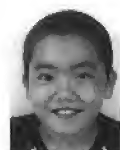
No. 5
照屋慶剛
今まで練習してきたことをすべて出し切って、優勝する事ができたので嬉しかった。



No. 6
照屋拓実
僕達が優勝できたのは、僕達だけでなく、地域の方々や女子などいろいろなたくさんの人達が協力してくださったおかげです。ありがとうございました。



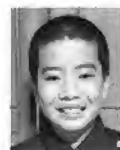
No. 7
親泊寛粋
ぼくは、ハンドボールを始めてまだ一年もたってないし、周りに迷惑ばかりかけてしまうけど、チームのみんなと全国制覇という目標を達成できて、とてもうれしいです。これからも「感謝」の気持ちを忘れずハンドボールを続けていきたいです。



No. 8
村山倖輝
念願だった優勝ができてとっても嬉しいです！　見えない所でいろんな人が協力してくれたとききました！　皆さんのおかげです！　ありがとうございます！



No. 9
嵩原蒼梧
周りの人に支えられて全国制覇できたので、とてもうれしいです。次は九州大会に向けて頑張りたいです。



No. 10
大浦兼周
僕は、全国大会で、決勝戦で東海ハンドボールスクールと当たって緊張しました。僕はスタメンじゃないけどスタメンが頑張ってくれたので、見事、全国優勝できました。スタメンに感謝したいです。

女子優勝 三郷ハンドボールクラブ（埼玉県）

三郷ハンドボールクラブ　**半村 茂夫**

過去の選手にありがとう

タイムアップの瞬間、これが現実とは信じられませんでした。

過去 11 回の出場はありましたが、どの代も上位チームや優勝チームと比べると戦力的にかけ離れたチームでした。しかしこのチームは 1 年生から 4 人入会し、コツコツと努力してきました。全国で戦えるかも知れないと思ったのは関東大会で優勝してからです。

全国の強豪とはそんなにやすやすと戦えない事は過去の実績から学んでいました。夜のミーティングでは、何を目標に辛い練習に耐えてきたか、指導者との信頼関係を再確認させ、自分のやってきた事に自信を持って戦う事の大切さ、相手を恐れてはいけない、全て出して楽しもうと話しました。

翌日、子供達は試合を待つ間もリラックスしたムードでした。実はチームに 1 人しかいない GK 竹井が関東大会決勝で怪我をしてしまい、練習に参加できず「全国大会も本来の 2 割の動きしかできないだろう」と診断を受けていました。本人は勿論、チームのテンションも下がった時期もありましたが、GK に負担させないようにチームの持ち味である DF を必死にやって守るしかない！と一致団結した子供達が全力を出しきりました。

私は中学校の指導者だった頃、春夏合わせて 19 回全国大会に出場しましたが、優勝はできませんでした。いつも、今の経験と知識があれば、あのチームにもっと勝たせてやれたのにと言う思いがあり、優勝の瞬間「過去の子供達に心からありがとう」という気持ちもあり涙があふれてきました。

多くの先輩が、努力すれば夢は叶うと言われてきましたが、子供達との信頼関係・頂点を目指す志の高さ・そして周囲の理解があれば夢はきっと叶うと確信しました。残念ながら、来年は人数不足でチームが組めません。しかし、今回の優勝でもう一度一から立て直し、あのブルーコートに立つ事を目標に頑張ります。ここまで最大の協力と理解をしてくれた菊池コーチに、この場をお借りして御礼致します。本当にありがとう御座いました。「2 人の夢」でした。

また、埼玉から駆け付けて頂いた卒業保護者の方、深夜帰宅にも関わらず多数の卒業保護者の方や卒業生が迎えてくれて感動が倍になりました。保護者の皆様方、そして最終日まで応援して頂きました関東の楽しい指導者の皆様、県協会の皆様に厚く御礼申し上げます。またこの素晴らしい大会が末永く続きますようにお祈りします。有難う御座いました。









期日：平成27年7月31日（金）～8月2日（日）
会場：豊田市総合育館（スカイホール）、豊田市運動公園体育館、豊田市高岡公園体育館、豊田市西部体育館、豊田市運動公園球技場

第23回全日本マスターズハンドボール豊田大会を終えて

競技委員長　小山 哲央

平成27年度第23回全日本マスターズハンドボールは7月31日（金）から8月2日（日）までの3日間愛知県豊田市で開催されました。

参加は競技Ⅰ（交流型）男子36チーム435名、女子17チーム177名、競技Ⅱ（順位決定型）男子20チーム275名、女子7チーム88名、更に競技Ⅲ（男性Over60・女性Over50）4チーム58名、競技Ⅳ(11人制)7チーム119名でした。延べで言いますと参加チーム数は91チーム・参加選手数は1,152名となり、どちらも大会史上最高を記録しました。

7月31日は開会式・競技運営委員会に先立って第12回11人制マスターズ（競技Ⅳ）が総天然芝の豊田市運動公園球技場で開催されました。今年の特徴は女性の参加者が急増したことです。台北女子チーム19名を始め、国内からも8チーム18名が参加し、合わせて37名、全体の3割以上を女性が占めたことになります。従ってチーム構成も台北女子チームのみ単独チームで、残り6チームは男女混成チームとなり、和気あいあいの雰囲気の中11人制ハンドボールを楽しみました。

8月1日と2日の2日間で行なわれた7人制の競技Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの中で特に目についたことは、競技Ⅱ（順位決定型）です。これまでマスターズといえば大会に合わせて全国から集まる全国型のチームが多かったのですが、今回の順位決定型は男女とも練習などでも集まりやすい地域型のチームが多くなったことです。決勝に残った男子4チーム（青と赤各10チーム2グループに分かれて行った）、女子2チームは共に地域型のチームで、試合内容を見るとコツコツと練習を積み上げているチームが勝ちあがってきたという印象を受けました。決勝3試合ともがっぷり4つに組み、その白熱した内容に観衆をうならせる好試合でした。

恒例の懇親会は、今年は7月31日金曜日ということで例年の半分約300名の参加者で行われました。沖縄県から参加のマミーズは参加者の多くを引き込んでダンスを、また台北女子チームはプロのダンサー（選手として参加）がベリーダンスを披露するなど宴を盛り上げて下さいました。

最後に我々実行委員は大会期間中は選手としてハンドボールを楽しみましたので、約200人のボランティアに大会運営を担っていただきました。豊田市の60歳からの体力再生教室及び体力増強教室の皆さん、（公社）愛知県柔道整復師会の皆さん、岡崎城西高校女子部員と豊田市内の5つの中学校のハンドボール部員の皆さんには本当に感謝申し上げます。

お蔭を持ちまして日程がスムーズに流れ、怪我人の少ない素晴しい大会にすることが出来ました。本当に有難うございました。





大会ボランティアに参加して

ボランティア代表　**魚住 啓子**

私の所属する60才以上の体力増強教室で、全日本マスターズハンドボールのボランティア募集があった。運動音痴で球技には縁のなかった私は、参加を躊躇したが、同じ高齢者の頑張る姿を見ておくのも良い刺激になるだろうと思った。日頃ご指導いただく大会委員長の小山先生の勇姿も見たいと思い参加を決めた。得点や時間の管理の簡単な仕事だと聞かされていたが、得点は電子機器を使い戸惑うことが多かった。試合の動きも早く、選手から一時も目が離せない緊張の連続であった。高校生が補助についてくれた。自分たちでやったほうが、スムーズに早くできたかもしれないが、もたつく我々に親切に応対してくれた。昼の休憩時間にはよちよち歩きの子供から、小学生のためのハンドボール教室が開かれた。我々ボランティアも仲間に入れてくれた。やってみると、試合での動きがなかなかむつかしいものだと実感。

マスターズと聞いて、中高年の大会と思っていたが、選手は皆若々しい。走り回る姿も生き生きしている。何より試合を楽しんでいる様子が見ていて気持ち良い。若い世代の選手を見れば自分の来し方を思い、70代、80代を見れば自分もかくありなんと思う。

試合には台湾のチームも参加していた。表彰式終了後、我々ボランティアを援助してくれた中学・高校のチームと台湾の中学生との親善試合が行われた。さすがボールさばきの速さと、身体の柔軟性に若さがみなぎる。

老いも若きも、男も女も、選手もボランティアも、そして国籍まで越えて、ハンドボールをキーワードに皆が一体になって過ごせたことは大変有意義な二日間であった。








～どうなるリオ五輪予選～

企画・広報委員
早川　文司

フリースロー
Free Throw

来年のリオデジャネイロ・オリンピックアジア予選が迫ってきた。先陣を切る女子代表「おりひめジャパン」は今月20日から愛知県体育館、男子代表は11月14日からドーハ（カタール）で予定されている。

「おりひめジャパン」は1976年モントリール大会に初出場で5位になって以後はオリンピックの舞台から遠ざかっている。今回は40年ぶりの出場を目指す。

今年度は5度の合宿のほか5月のハンガリー遠征、8月のハンガリー、デンマーク遠征をこなし、ヒロシマ国際大会では中国とアジア予選の前哨戦ともいえる実戦も経験した。栗山監督が目指す機動力を存分に生かしながら、本番への課題をどこまで消化し、予選での戦い方を明確に出来るかだろう。

予選には日本のほか韓国、中国、カザフスタン、ウズベキスタンの5カ国が参加する見込みで、1回戦総当たりリーグで代表の座を競う。

ポイントはライバル韓国にどう立ち向かうかだ。昨年の仁川アジア大会、今春のアジア選手権ではいずれも韓国に敗れ2位。リオへの道筋をつけるには打倒韓国に向けてホームの有利性を発揮するしかない。

一方、男子は1988年ソウル大会以来の5度目の出場を狙う。参加は12カ国が予定されている。ドーハでの戦いだけに若干、北京大会予選で物議をかもした“中東の笛”が気にはなるが、それはさておき、全力で持てる力を発揮してもらいたいものだ。

ロンドン大会予選から2度も監督交代があり、今年3月から3人目の指揮官として岩本・大崎電気監督が就任した（始動は4月）。5度の合宿のあと8月初旬からフランス、スペイン遠征を行った。フランスではグルノーブルで国際カップに参戦、世界のスーパースターらとの腕試しをしたようだ。

岩本体制になってからの時間は短い。このハンディをどのように乗り越えるかも、一つの大きなテーマになると思うが、世界最高のプレーヤーが集う実戦の舞台で得た経験は貴重である。世界で感じたハンドボールを見る目、考え方が予選という厳しく、緊張する舞台でどこまで生かされるか楽しみだ。

また、近来メキメキと力をつけている中東勢、アジアでは韓国などを相手に厳しい戦いが予想されるが、昨年の仁川アジア大会、アジア選手権でともに史上最低の9位という結果を跳ね返すジャパンの底力を発揮、代表キップを手中にしてもらいたいものである。

いずれにしろハンドボール・サポーターは日本がオリンピックという世界の舞台に立つことを首を長くして待ち望んでいることだけは確かだ。悲願のオリンピック出場は、大げさな表現をすれば、今後の日本ハンドボール界の浮沈を握っているとも言えよう。

JHAジュニアアカデミー訪問レポート



2015年度の日本代表選手のカテゴリーは、日本代表（男子・女子）、学生（男子U-24・女子U-24）、ジュニア（男子U-21・女子U-20）、ユース（男子U-19・女子U-18）、U-16（男子・女子）が編成され、それぞれアジア選手権、世界選手権、国際試合等に挑戦している。2008年10月に開講したJHAジュニアアカデミーは、NTSなどで発掘した大型選手を中心に個の力を最大限に伸ばす取組みを図っており、2015年度第一回目の育成合宿が行われている味の素ナショナルトレーニングセンターを訪れ、指導に当たるコーチや参加選手から話を聞いた。

現場で陣頭指揮に当たる田中茂アカデミーコーチから、代表選手強化にはU-15世代からの育成と強化が必須であり、そのため、所謂、アカデミー選手選考では、大きな選手の育成を主眼に考えていること。又、高校生ではインターハイ予選が終了すると、そのまま引退のケースもあり、大学等次のステージまでの空白期間が長く存在し、この世代で見れば実に貴重な成長の時間をロスしている現状があり、アカデミーでは年間に亘り長期の空白期間が生じることの無いよう定期的に育成合宿を開催していること。特に３月には長期間の合宿を計画し、４月からの新たな環境への準備期間としても有効に使ってほしいと考えていること。更に、今回の合宿からトレーナースタッフを充実させ、選手の事前事後の怪我の防止にも、ストレッチ等に十分な時間を割き、体調管理などにも万全の対応を図っていること。元々、体格が良い選手を選んでおり、これからの競技生活を進める上でのポテンシャルは充分に在り、自己のやる気が一層発揮され、更には体力面・精神面での成長が伴えば、将来の日本代表候補の人材へ成長することも期待され、大いなる飛躍を願っていることなど、力強い発言を戴いた。


田中茂コーチ

第１回JHAジュニアアカデミー育成合宿参加者

期日：平成27年8月10日（月）～8月14日（金）
場所：東京都・味の素ナショナルトレーニングセンター

役　職	氏　名	所　属
コーチ	田中　茂	公益財団法人日本ハンドボール協会
コーチ	大城　章	公益財団法人日本ハンドボール協会
GKコーチ	荻田　圭	公益財団法人日本ハンドボール協会・秋田県立湯沢高校
トレーナー	岡本雅信	岡本接骨院

男子

	名前	学年	身長	所属
1	山口勇樹	高3	193	熊本国府高校
2	島　峻竜	高3	189	神戸国際大学付属高校
3	大久保秀祐	高3	190	福井商業高校
4	中川翔太	高3	185	法政第二高校
5	前原大輝	高3	188	横浜創学館高校
6	中田凌河	高3	186	高岡向陵高校
7	阿部奎太	高3	185	学法石川高校
8	大杉拓巳	高2	185	四日市工業高校
9	服部將成	高2	188	春日丘高校
10	髙野颯太	高2	190	浦和学院高校
11	木村圭汰	高2	185	北陸高校
12	平尾克己	高2	186	近江兄弟社高校
13	部井久アダム勇樹	高1	190	博多高校
14	香月大輔	高1	185	浦和学院高校
15	甲斐裕人	高1	185	小林秀峰高校
16	沖　正太朗	高1	191	不来方高校

女子

	名前	学年	身長	所属
1	グレクレア　フランシス	高3	172	横浜創英高校
2	田中葉月	高3	172	日本大学山形高校
3	田村　圭	高3	172	横浜平沼高校
4	山口眞季	高3	173	四天王寺高校
5	泉　幸歩	高3	177	四天王寺高校
6	秋山静香	高3	170	玉野光南高校
7	竹谷美樹	高3	170	水海道第二高校
8	鈴木姫らら	高2	171	郡山女子大学付属高校
9	仲本　華	高2	173	浦和実業高校
10	清宮ちひろ	高2	174	埼玉栄高校
11	堀米香耶	高2	171	八千代高校
12	高木奈央	高1	171	市邨高校
13	阿久津祐子	高1	171	埼玉栄高校
14	坂田佳那	高1	173	日川高校

参加選手へのインタビュー

今回ジュニアアカデミー選手に選ばれての感想や2020年東京五輪での自分の姿、自己のアピールポイント等を聞いた。


左から、高木さん、グレイクレアさん、泉さん、秋山さん

●高木奈央さん（市邨高校１年：171 ㎝）

昨年中学生でセンタートレーニングにも参加していましたが、まさか今回自分が選ばれるとは思いませんでした。筋力が無いので、この合宿ではパワーアップして帰りたいです。2020年、自分にもチャンスはあるので、果敢に挑戦していきたいです。アピールポイントは、左利きであり、右45度からデフェンスの掲げる手の上から、流しに・引っ掛けに打ち分けることです。デフェンスでもシュートブロックするのが楽しいです。チームに戻っては、より打点を高くして、得点率の高いシュートが打てるように更に練習したいです。

●グレイクレア　フランシスさん（横浜創英高校３年：172 ㎝）

初めて選ばれましたが練習はきついと聞いていたので覚悟を持って来ました。センタートレーニングとは違うとトレーニング内容で、自分は体力が無くフィジカルも弱いので体力面を強化して戻りたいです。小学校低学年から始めたハンドボールの夢は決めていて、オリンピックに日の丸を付けてコートに立つことで、お世話になっている人たちに恩返しをしたいです。得意はロングシュート、デフェンスをかわしてのシュートや、キーパーとの駆け引きも得意です。チームに戻って、学んだフットワークやデフェンスの当り、GKのキーピング等伝えていきたいです。

●泉　幸歩さん（四天王寺高校３年：177 ㎝）

中学の時はフィールドプレイヤーでしたが高校入学後にGKに変わり、今回初心者にもかかわらず選ばれ、自分の為にも頑張りたいと思います。2020年はチャンスだと捉え、今は上手くないけれど位置取りなど勉強して、代表選手に選ばれるレベルまで達したいと思います。アピールポイントは、高さを活かしたダイナミックなキーピングです。下のシュートはセービングで確実に止め、上のシュートも高さで勝負したいです。チームに戻ってからは、苦手とする廻り込みのポストシュートや45度からのシュートなど練習の中で克服していきたいです。

●秋山静香さん（玉野光南高校３年：170 ㎝）

昨年に引き続き選ばれどのようなことをするのか分かっていたが、自身のレベルを更に上げてチームに貢献できるようにしたいです。将来の夢、それは2020年には応援席でなく代表選手としてコートに立ってプレイしている自分の姿です。アピール出来るところは、背の高さを活かしたロングシュートや相手を騙してのフェイントが好きなこと、守備でも相手のシュートをブロックすることです。チームに戻っては、アカデミーで学んだシュート練習を後輩に伝えたいし、自分のプレイも向上するように練習でもっとチャレンジしていきたいです。


左から、前原さん、島さん、大久保さん、中川さん

■前原大輝さん（横浜創学館高校３年：188 ㎝）

アカデミーは身長が高く大型の選手が選ばれるので、今回選ばれて光栄に思います。私は、大学卒業後には、実業団に進むことを希望しています。2020年のオリンピック代表選手に選ばれたいですし、駄目でも、次の2024年には選ばれるよう努力していきたいです。190 ㎝のGKは数少ないので、高さをアピールポイントとして考えています。高校では、思い切りの良いキーピングを学びましたので、自分の強みにしていきたいです。アカデミーでは、二人のコーチから、質の高い練習を体験しましたので、チームに戻って後輩にも伝えていきたいと思います。

■島　峻竜さん（神戸国際大学付属高校３年：189 ㎝）

昨年初めて選ばれたときは、既に選ばれていた先輩よりも大きかったので、是非とも選ばれたいと思っていました。2020年の東京五輪では選ばれるか自信はありませんが、期待されているならば、その機会を勝ち取りたいと思います。大学卒業後もスポーツ関連の仕事に就き、ハンドボールにも関わりを持っていたいと考えています。身長が大きいのが特



参加者集合写真

徴ですが、ここに来て廻りも大きいので圧倒されます。自分の学校は走るのが武器ですので､自身の強みにもしています。今回、フィジカル面でのトレーニングも幾つか習得しましたので、後輩にも指導していくつもりです。

■大久保秀祐さん（福井商業高校３年：190㎝）

高校１年から連続でアカデミーに参加していますが、練習が厳しいのですが刺激になります。2020年には選んで貰えるように期待に応え、最終選考まで残って選ばれるようになりたいです。190㎝の身長の左利きの選手は少ないので、これを武器に更にパワーを付けて、他を圧倒していきたいと考えています。高校に戻ったときには、パスのスピード、キャッチにおける足の動きなど、練習への意識を挙げていけるように話をしたいです。国体等選ばれていないので、アカデミーの育成合宿は、自分にとってモチベーションの維持など大変ありがたい活動と感謝しています。

■中川翔太さん（法政第二高校３年：185㎝）

将来の自分に対して期待して貰っていることに感謝しなくてはと思いました。高校ではハンドボールは勿論、人間性も育ててもらっていると思います。大学に進学しても、ハンドボールで活躍することに加え、周りからも信頼性を得られる人間になりたいと思います。大型の選手ではないので、走力やフィジカル面を強化し、60分間走り続けることができる選手になりたいです。又、自分は笑顔と明るさでチームを盛り上げていくのが強みです。後輩には、普段の練習にも真剣に取り組み、その成果は最後には自分に返ってくることを伝えていきたいです。



指導する、大城章コーチ




練習風景

「第18回ハンドボール研究集会」報告

学校体育ハンドボール検討
専門委員会委員
小岩井 浩明

8月4日（火）・5日（水）の二日間にわたり、長崎県佐世保市において「第18回ハンドボール研究集会」が開催されました。大阪インターハイでは熱戦が繰り広げられていましたが、佐世保でも参加者のハンドボールに対する熱い想いが語り合われました。

［1日目］

研修会のスタートは、香川大学・米村耕平先生から「小学校および中学校体育授業におけるゴール型教材としてのハンドボールの系統的指導のあり方」について講義をしていただきました。米村先生が授業作りで一番大切にされている『運動能力下位児、運動技能下位児、戦術能下位児、運動嫌いな子どもたちを体育授業の主役に！』という考えのもと、これを実現させるゴール型教材として、ハンドボールを素材として教材化し、さらに攻守交代から攻守切り替え・一方向ゴールから両サイドゴール・グリッド有から無などの組み合わせを系統的に仕組んでいくゲームを例示していただき、ハンドボールの教材的価値の高さを教えていただきました。

次に、小学校現場の先生方による研究・実践報告が行われました。

鹿児島県国分小学校・肝付啓輔先生「だれにでもハンドボール授業の普及を目指して―小学校体育授業を通したハンドボールまちづくり―」

大分県丹生小学校・古谷裕邦先生「速くてダイナミックなハンドボールのおもしろさを伝える授業とは」

香川県新番丁小学校・木田英登先生、香川大学・米村耕平先生「体育授業における思考力を高める学習過程のあり方―学習成果につながるグループによる話し合い活動を通して―」

熊本県山鹿小学校・豊永千速先生「主体的・協働的な学びを育むハンドボール授業の工夫―簡易ゲームを取り入れた「学びのプロセス」の構築―」

岡山県馬屋下小学校・信原悦治先生「投能力向上に関する一考察―スティックスローの実践を通して―」

どの報告からも、ハンドボールが教材と



して非常に価値が高いということ、そしてなにより、先生方がハンドボールの魅力を子どもたちに伝えたいという熱い想いが伝わる発表でした。日々の先生方の研究と努力、熱意に頭が下がる思いです。

1日目の最後には、天理大学・木下光正先生から「魔王ゲットゲーム（小学校3・4年生対象）」をご紹介いただき実技研修が行われました。まず始めに、1回の授業での複数単元展開の方法や、成果を出すために必要な単元の大きさを考えるよう教えていただきました。また『目の前の子どもたちの実態・発達に合わせた授業展開』『わかる言葉で動きを示す』『投捕の技能はゆったりと時間をかけて身につけさせる』『シンプルな教材で、誰もができる授業』をすることも教えていただきました。これらを踏まえ、参加者で魔王ゲットゲームを実際に行いました。ゴールの代わりにコーン（魔王の角に見立て）にボールを当てるシンプルなゲームです。このゲームに至るまでの投捕の技能上達に向けた簡単なボール操作の練習方法から、ゆっくり丁寧に教えていただきました。先生が研修の中で「タスクゲームという言葉はあまり好きじゃないんです。子どもたちにとっては、タスクもメインもなく、まさにゲームですから…」こんな風に考えていくと子どもたちが夢中になって取り組めるような教材が作れるのかもしれません。

［2日目］

文部科学省スポーツ・青少年局体育参事官付教科調査官　高田彬成先生から「今、体育・保健体育に求められること」と題して講演が行われました。

「楽しいは当たり前、そこに指導内容がなければならい。この授業で何を身につけたのか、そして、これから先、その力がどう生かされていくのか…」生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てることが、明るく豊かな生活を営む態度を育てることにつながっていく。まさに、1日目に、米村



先生・木下先生から示唆していただいたことを裏付ける講演でした。全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果から、体力合計点が高い児童ほど「もっとスポーツをやりたい」という願いを持っていることがわかります。ということは、力を付けてあげることができれば、もっと運動に親しむ子どもたちが増えるということです。逆に、力を付けてあげることができなければ…。学校の体育授業が、子どもたちの体力の低下、運動離れを防ぐ最も重要な時間であることを再認識させられる講演でした。

研修会の最後は、佐世保市立大塔小学校6年生と山口信二先生による授業提案でした。山口先生ご自身は陸上競技が専門ですが「ハンドボールはいいですよ！」と語ってくれ、数年前から授業実践をされているそうです。さらに10月にもハンドボールを教材として研究授業を行うということで、参観された先生方からたくさんの意見やアドバイスをいただきたいと熱心に授業作りに取り組まれていました。授業では、能力の低い子どもを活躍させることはもちろん、能力の高い子どもも「自分らしさを発揮しながら（チャンスであれば遠目からでもシュートを打つ）、さらに友達も活躍させてほしい（パスをつなぐ）」と願い、コートの広さや人数、ゴールの大きさなど工夫された授業を提案してくれました。山口先生のようにハンドボールの教材としての魅力を感じてくれる先生方が増えることを願います。

第18回ハンドボール研究集会の開催にあたり、長崎県ハンドボール協会会長・加納洋二郎様、理事長・児玉浩三郎様をはじめ、長崎県ハンドボール協会、佐世保ハンドボール協会の皆様には大変お世話になりました。この会が無事に開催されたことに感謝申し上げます。

最後に、今回をもちまして秋田大学・佐藤靖先生が、岐阜大学・杉森弘幸先生へ学校体育ハンドボール検討専門委員会委員長を引き継がれます。ここまでこの集会を盛り上げてくれた佐藤先生に感謝申し上げます。

特別寄稿

女性競技者の抱える問題、女性指導者増加のための具体的方策

金谷麻理子（筑波大学）

本稿は、近年の体育・スポーツの活動場面における体罰・暴力に関する問題をうけて、日本体育学会が設置した体罰・暴力根絶特別委員会の活動の一部であり、男女共同参画委員会委員の立場から「女性競技者の抱える問題と女性指導者増加のための具体的方策」としてまとめたものである。

筆者は、以前は競技者として競技スポーツに関わり、現在は大学で教員として体育・スポーツの指導に携わるとともに、競技団体や学術団体とも関連した業務を行っている。すなわち、この道数十年という熟練指導者には到底及ばないが、わが国における競技スポーツの現実の一面を見てきたと言えるだろう。本稿はそのような筆者の経験を踏まえ、前半ではアンケート調査の結果から体罰・暴力のこれまでの実情をとらえ、後半では女性の立場からみた競技スポーツにおける女性選手および女性指導者のあり方について考察したものである。ハンドボールの普及・振興ならびに競技力向上活動に関わる方々の参考になれば幸いである。

以下、J-STAGE に公開されている体育学研究 Vol.60（2015）No.Report からの転載。（https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpehss/60/Report/60_60.R15/_article/-char/ja/）

Ⅰ．はじめに

本論では、体育・スポーツにおいて男女共同参画のさらなる推進を目指すという立場から、まず指導者および競技者の性別に着目して、これまでの体罰・暴力に関する調査を行った。そして、その結果と筆者が競技力向上の現場で体験した経験を踏まえて、女性競技者が抱える問題と女子指導者増加のための具体的方策について検討した。

Ⅱ．指導者および競技者の性別に着目した体罰・暴力に関するアンケート調査について

1．アンケート調査の概要および主な質問項目

アンケート調査の概要および主な質問項目は以下の通りである。

(1) アンケート調査の概要

・実施日時：2014 年 10 月 15 日～ 11 月 4 日
・配布対象および配布数：某大学体育会運動部 46 クラブ、1689 通
・回収数：804 通（回収率 47.6%）

(2) 主な質問項目

・基本属性（学年、性別、競技種目）
・運動生活史（各年齢カテゴリーにおいて経験したスポーツ種目と主な競技成績等）
・練習場面における体罰・暴力に関する経験（有無、指導者の性別、理由、頻度等）
・体罰・暴力に対する考え方（認識とその理由、性差についての認識等）

2．主な調査結果

以下では、本調査の結果の中から、顕著な特徴が表れた結果のみを示す。

(1) 各年齢カテゴリーにおける体罰・暴力の経験とその行為の種類について

表 1 は、各年齢カテゴリー（小学校時代、中学校時代、高校時代）におけるスポーツの練習場面での体罰・暴力に関する経験（受けた、または見聞きした）を示したものである。いずれの年齢カテゴリーでもスポーツの練習場面において競技者（アンケート回答者）の約 10%が体罰・暴力を受け、または体罰・暴力を見聞きしたとしている。これは阿江（1999）が示した回答者 596 名中 37.4 %が、また西坂（2007）が示した回答者 226 名中 28.8%が体罰を受けたとしている結果より少なくなっている。しかし、阿江らの調査がいずれも体育・スポーツを専門とする女子大学生競技者を対象としているのに対し、本調査は体育を専門としない者も含む、かつ男女の大学生競技者

表 1　体罰・暴力の経験

体罰・暴力を受けた

	小学校時代	中学校時代	高校時代
あり	75 (9.3%)	88 (11.0%)	75 (9.3%)
なし	728 (90.7%)	714 (89.0%)	728 (90.7%)
合計	803 (100.0%)	802 (100.0%)	803 (100.0%)

体罰・暴力を見聞きした

	小学校時代	中学校時代	高校時代
あり	68 (8.5%)	118 (14.7%)	102 (12.7%)
なし	735 (91.5%)	684 (85.3%)	701 (87.3%)
合計	803 (100.0%)	802 (100.0%)	803 (100.0%)

を調査対象としたため、これらを単純に比較することはできないが、少しずつ減少傾向にあることが推察される。

図１および図２は、体罰・暴力の行為の種類とその理由を示したものである。なお、図中の「」内の略語は以下の質問項目を示している。

〈「略語」が示す質問項目〉
- 「殴る」：殴る・蹴る・物で叩く等の暴力
- 「人格」：人格を否定するような暴言
- 「立場」：教員や指導者、監督の立場を利用した威圧や脅し
- 「セクハラ」：セクシャルハラスメントに該当する不適切な行為
- 「試合」：試合に負けた、競技成績
- 「失敗」：言われたことができない、失敗する
- 「気持ち」：気がゆるんでいた、やる気がなかった
- 「代表」：皆の代表として、怒られ役であった
- 「機嫌」：指導者の機嫌
- 「不明」：理由不明

図１によると、体罰・暴力の行為の種類は、「殴る」（小学校時代 89.8％、中学校時代 92.4％、高校時代 87.4％）が最も多く、次いで「人格」が多かった（小学校時代 29.3％、中学校時代 37.1％、高校時代 45.5％）。また、各年齢カテゴリーにおける体罰・暴力の理由は、「失敗」が半数を占め（小学校時代 62.6％、中学校時代 63.7％、高校時代 65.5％）、「気持ち」や「試合」も主な理由の一つとなっている（小学校時代 46.1％、中学校時代 51.7％、高校時代 46.5％）（図２）。他にも「代表」や「機嫌」、「不明」等が見られるが、これらは競技者が、自らには否がないことを自覚している状況下で体罰・暴力があったことを示しており、指導者の身勝手な行為と言わざるを得ない。なお、これらの項目について年齢カテゴリーによる顕著な違いはみられなかった。

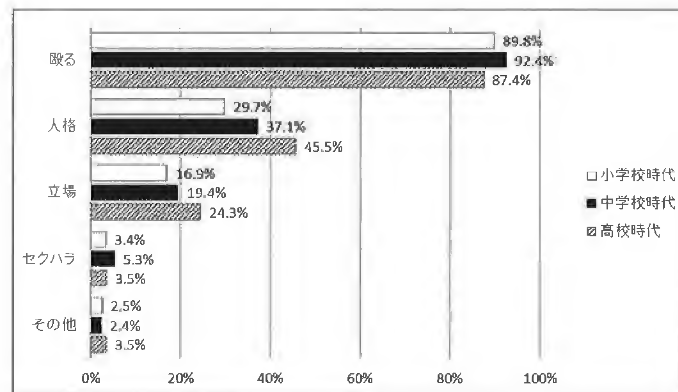


図１　体罰・暴力の行為の種類

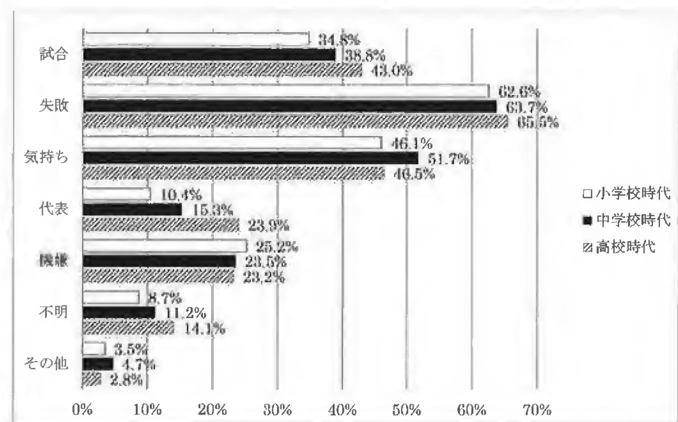


図２　体罰・暴力の理由

表２は各年齢カテゴリーにおいて体罰・暴力を行った指導者の性別を示したものである。これによると、男性指導者が、小学校時代では 118 人中 110 人（93.3％）、中学校時代では 168 人中 160 人（95.2％）、高校時代では 143 人中 136 人（95.1％）と圧倒的に多い。この結果は、阿江（1999）の女子大学生を対象とした高校期の体罰に関する調査結果（596 名中 37.4％が体罰を報告し、そのうち体罰を行う指導者の 85％が男性）と同様に非常に高い割合を示している。また、体罰・暴力を行う指導者に男性が多いというのは、そもそもほとんどの指導者が男性であることと関連している（阿江、2000）。同時に、少数であるが体罰・暴力を行う女性指導者がいることも示されており、体罰・暴力を行うかどうかは性別のみでは判断できない。

表２　体罰・暴力を行った指導者の性別

		小学校時代	中学校時代	高校時代
男性	実数	110	160	136
	%	(93.3%)	(95.2%)	(95.1%)
女性	実数	7	8	7
	%	(5.9%)	(4.8%)	(4.9%)
両方	実数	1	0	0
	%	(0.8%)	(0.0%)	(0.0%)
合計	実数	118	168	143
	%	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)

表３は、競技者および指導者の性別の組み合わせを示したものである。これによると、どの年齢カテゴリーにおいても男性指導者が全体の 85％以上を占め、圧倒的に男性指導者が多いことがわかる。この調査結果は、（公財）日本体育協会（2014）の調査による運動部活動指導者における男性指導者の割合（中学校 71.5％、高等学校 80.3％）よりも高い。このことについて、本調査では競技者のスポーツ経験の場は問わなかったため単純に比較することはできないが、教員だけでなく社会体育のインストラクターやコーチを含めるとさらに男性指導者の割合が高くなるといえるであろう。

また、「男性指導者×男性競技者」の組み合わせが最も多く、次いで「男性指導者×女性競技者」、「女性競技者×女性競技者」、そして「女性指導者×男性競技者」の順になっている。また、女性指導者においては、男性競技者を指導する女性指導者は小学校時代では 8.2％、中学校時代では 6.0％、高校時代では 4.2％と極めて少なく、こ

表３　競技者および指導者の性別の組み合わせ

小学校時代

			指導者 男性	女性	合計
競技者	男性	実数	648	58	706
		%	(91.8%) *	(8.2%)	(100.0%)
	女性	実数	207	76	283
		%	(73.1%)	(26.9%) *	(100.0%)
合計		実数	855	134	989
		%	(86.5%)	(13.5%)	(100.0%)

$^{*}p<.05$

中学校時代

			指導者 男性	女性	合計
競技者	男性	実数	580	37	617
		%	(94.0%) *	(6.0%)	(100.0%)
	女性	実数	187	70	257
		%	(72.8%)	(27.2%) *	(100.0%)
合計		実数	767	107	874
		%	(87.8%)	(12.2%)	(100.0%)

$^{*}p<.05$

高校時代

			指導者 男性	女性	合計
競技者	男性	実数	503	22	525
		%	(95.8%) *	(4.2%)	(100.0%)
	女性	実数	174	47	221
		%	(78.7%)	(21.3%) *	(100.0%)
合計		実数	677	69	746
		%	(90.8%)	(9.2%)	(100.0%)

$^{*}p<.05$

表４　競技者と指導者の性別の組み合わせにおける体罰・暴力の行為の種類（複数回答あり）

小学校時代

指導者→競技者		殴る	人格	立場	セクハラ	その他
男性→男性	実数(56)	53	11	9	0	2
	%	(94.6%)	(19.6%)	(16.1%)	(0.0%)	(3.6%)
男性→女性	実数(13)	12	7	3	1	0
	%	(92.3%)	(53.8%)	(23.1%)	(7.7%)	(0.0%)
女性→男性	実数(2)	2	0	0	0	0
	%	(100.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)
女性→女性	実数(3)	2	1	0	0	0
	%	(66.7%)	(33.3%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)
合計	実数(74)	69	19	12	1	2
	%	(93.2%)	(25.7%)	(16.2%)	(1.4%)	(2.7%)

中学校時代

指導者→競技者		殴る	人格	立場	セクハラ	その他
男性→男性	実数(58)	57	20	12	2	1
	%	(98.3%)	(34.5%)	(20.7%)	(3.4%)	(1.7%)
男性→女性	実数(23)	20	14	4	2	1
	%	(87.0%)	(60.9%)	(17.4%)	(8.7%)	(4.3%)
女性→男性	実数(1)	1	0	0	0	0
	%	(100.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)	(0.0%)
女性→女性	実数(3)	1	2	0	0	1
	%	(33.3%)	(66.7%)	(0.0%)	(0.0%)	(33.3%)
合計	実数(85)	79	36	16	4	3
	%	(92.9%)	(42.4%)	(18.8%)	(4.7%)	(3.5%)

高校時代

指導者→競技者		殴る	人格	立場	セクハラ	その他
男性→男性	実数(45)	41	17	14	1	2
	%	(94.6%)	(19.6%)	(16.1%)	(0.0%)	(3.6%)
男性→女性	実数(19)	19	9	3	0	0
	%	(100.0%)	(47.4%)	(15.8%)	(0.0%)	(0.0%)
女性→女性	実数(5)	3	3	1	1	0
	%	(60.0%)	(60.0%)	(20.0%)	(20.0%)	(0.0%)
合計	実数(69)	63	29	18	2	2
	%	(91.3%)	(42.0%)	(26.1%)	(2.9%)	(2.9%)

れに対し、女性競技者を対象とする場合は、小学校時代では26.9％、中学校時代では27.2％、高校時代では21.3％と競技者が男性である場合に比べ、女性指導者数の割合が高くなっている（$p<0.05$）（表３）。

表４は、競技者と指導者の性別の組み合わせにおける体罰・暴力の行為の種類を示したものである。これによると、いずれの年齢カテゴリーにおいても「殴る」が最も多いが、「男性指導者×女子競技者」の場合、「殴る」のみならず「人格」もそれぞれ半数近くを占める傾向がみられた（小学校時代53.8％、中学校時代60.9％、高校時代47.4％）。また、中学校・高校カテゴリーにおける「女性指導者×女性競技者」の場合は、「男性指導者×男性競技者」および「男性指導者 × 女性競技者」に比べ、サンプル数は少ないものの「殴る」が低く、「人格」が高い傾向がみられた。

このように体育・スポーツにおける競技力向上の現場では、男性指導者の数が女性指導者に比べ圧倒的に多く、また体罰・暴力を行う指導者も男性が多いという結果になった。ただし、女性が指導する場合、体罰・暴力の行為の種類が男性指導者のものとは異なる可能性があるものの、女性指導者による体罰・暴力もあり得ることが明らかになった。

なお、本調査からは、体罰・暴力の経験とスポーツ種目や競技成績、体罰・暴力の是非、体罰・暴力の性別による影響等については顕著な結果は見出せなかった。

以下では、この調査結果を踏まえて、女性競技者が抱える問題と女性指導者増加のための方策について検討していく。

Ⅲ．女性競技者が抱える問題と女性指導者増加のための方策について

１．女性とスポーツに関する近年の動向

近年、国内外の多くのスポーツ関連組織によって、さまざまな視点から女性のスポーツを発展させるための問題点や方策が示されている。

世界的には、国際オリンピック委員会（以下、IOC）が、1994年の女性とスポーツに関する第６回国際ワーキンググループ（IWG）世界会議において、女性があらゆるスポーツに最大限に関わることが出来るスポーツ文化の実現を目指すという「ブライトン宣言」に署名し、この会議の開会式でトーマス・バッハ（Thomas Bach）会長は、スポーツは男女平等を前進させるための中心的な役割を担うことができると発言した。

一方、わが国では、文部科学省が「スポーツ基本法」（文部科学省、2011）に基づく「スポーツ基本計画」（文部科学省、2012）に女性スポーツに関する具体的な振興策を示した。特に、「スポーツ基本計画第３章」では、今後５年間に総合的、かつ計画的に取り組むべき施策として、女子中高生の運動部離れが深刻化し

ていること、女性アスリートに対する効果的な支援がいまだ研究・開発途上であること、女性リーダー（意志決定者、指導者、サポートスタッフ）が不足していること、の３つの課題を挙げている。順天堂大学（2013）では、女性アスリートが直面しやすい課題は「身体・生理的な課題」「心理・社会的な課題」「組織・環境的な課題」の３つに分類できるとしている。また、女性アスリートの戦略的強化支援システムの構築に向けた方策と活動方針を提案するとともに、女性アスリートが活躍している諸外国の具体的な取り組みを明らかにし、今後さらに女性アスリートが活躍するためには関連組織の連携が不可欠であることを指摘している。文部科学省（2013）は、わが国の主要な体育・スポーツの関連団体に登録する女性コーチが男性のコーチに比べて少ないことやスポーツ団体のマネジメントを担う女性役員やスタッフの数が少ないこと、そして誰もがスポーツに親しむためには女性コーチや女性マネジメントスタッフの増加と女性のスポーツ参加を促進する必要があることを指摘している。山口（2013）は、「女性の国際競技力は向上したが、指導者およびスポーツ組織の意志決定機関において活躍する女性の数は依然として少ない」ことを指摘し、その一要因として「学歴とそれに伴う資格」を挙げている。また、ライフイベントとキャリアの関係については、ライフイベントを優先している傾向が見られ、この場合競技団体との関係については、「支援を期待していない代わりに、積極的に関わろうとは思わない」というような、女性自身がリーダーになることを望んでいないケースも見受けられるという。

このように近年では、国内外でスポーツにおける女性の積極的な参画が望まれており、そのための方策が提案されている。実際これによってスポーツ関連の組織では、以前皆無だった女性役員の数が女性枠の設置によって徐々に増えてきている。また、多くの年代の女性たちが抵抗なく興味を持ったスポーツに取り組めるようになり、国際的な競技会における女子競技者の活躍もめざましい。しかし、前述した調査結果にもあるように、指導者については相変わらず圧倒的に男性が多く、この点について根本的な解決策は見出せていない。そこで本論では、先の調査結果と筆者が競技力向上の現場で体験した経験を踏まえて、女性競技者が抱える問題と女性指導者増加のための方策について検討する。

２．女性指導者の現状

近年、わが国においては雇用制度の変化によって「共働き」世帯が増加しており、女性の社会進出に対する意識も高まっている。しかし、内閣府（2012、2014）によると、わが国の半数の男性は「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」と考えており、家庭生活における夫の家事・育児に費やす時間は欧米に比べて短時間に留まっている。また、待機児童の問題など女性の社会進出のための制度も未整備である。つまり、時代の流れによって社会における男女の役割は変化してきているものの、男性の家庭に対する考え方は旧態依然のままであり、男性中心の社会構造のあり方はいわゆる「男性社会」といえる。

そして、このことをスポーツの世界に照らし合わせてみると、本論の調査結果にあるように、スポーツにおける指導者と競技者の性別による組み合わせは４通りあり（表３）、どの年齢カテゴリーにおいても男性指導者の数が圧倒的に多かった。すなわち、スポーツの指導者の世界もまた一般社会の構造と同様に「男性社会」である。

このようななか、女性指導者はどのようにスポーツと関わっているのだろうか。

この場合、まず考えられるのは、「男性社会」の生活に適応するパターンである。比較的時間が自由になる若手の時期、あるいは独身の場合は、男性同様の生活様式で活動をすることができる。そして、その反対のライフイベント等のきっかけを機にスポーツから離れるというパターンである。現状としては、多くの元女性競技者がこのパターンに当てはまる。

次に、女性特有の妊娠、出産、そして授乳等の一部の育児を含むライフイベントとスポーツ指導を両立させるパターンである。この「両立」パターンにはさらにスポーツとの「関わり方を変える」タイプと、「一時的に中断」するタイプの２つのタイプが考えられる。この「両立」パターンではいずれも夫をはじめとする家族の理解と協力が必要であり、特に子どもをもつ女性指導者の場合は、どんなに周囲の協力があっても女性にしか成し得ないことがあるため、男性指導者以上に協力体制を整える必要がある。また、この場合、所属する組織の側の対応も不可欠である。「関わり方を変える」タイプでは、いわゆる「フルタイム」から「パートタイム」への変更が受け入れ可能であるか否か、また「一時的に中断」タイプでは一度離れた女性指導者を再度雇用することが可能か否か、ということである。これは、所属組織のあり方にもよるが、新たに人材を確保する必要があり、かつ子どもの年齢が低いうちは突然の欠勤や時間の短縮等も予想され、その都度対応が必要となる。人材が豊富な組織であればよいが、少数で運営している場合には組織としても難しい対応を迫られることになる。さらに、スポーツの競技力向上の現場ならではの問題として「パートタイム」で競技者を育成できるのかという問題も挙げられる。この点は、競技者のレベルにもよるが、特定の役割やアシスタントとして指導に携わるならば「パートタイム」でも十分に役目を果たすことができる。しかし、監督・ヘッドコーチとして中心的な立場でチームを率いていく場合にはそうはいかない。競技者は常に「今」を生きる唯一無二の存在であり、競技者と指導者の出会いも「一期一会」である。そして、時間もかかる。一般的に、トップアスリートの養成には、幼少期からの専門的なトレーニングが不可欠であり、競技者として一人前になるまでには膨大な時間と労力を費やす。そして、トップアスリートに到達しても現役生活を退くまでその生活は続いていく。つまり、競技生活は逃すことのできない「今」の連続である。そのため女性指導者のなかには、スポーツの現場から一時的にでも離脱することを望まず、自身のライフイベントを先延ばしにする、あるいはあきらめる者も少なくない。

このようにスポーツにおける数少ない女性指導者は、幾多の

問題と向き合いながら自分なりのスポーツとの関わり方を決め、日々競技者と向き合っているのである。

3．女性競技者が抱える問題

女性競技者が抱える問題として真っ先に挙げられるのが、男性指導者の女性特有の身体的特徴への理解度の低さである（順天堂大学、2013）。このことは、女性競技者は男性指導者に対して自身の身体的問題を相談することができない、あるいは男性指導者が女性競技者の申し出を聞き入れない、あるいは考慮しない、ということである。当然のことながら競技者の体調管理という観点では、主たる指導者が競技者の身体的特性を深く理解しているに越したことはない。しかし、この種の理解は実体験のない異性には限度がある。これはまた男女の関係が逆の場合も然りである。さらに、いざ勝負の最前線に立つと二の次になることも少なくない。そして、このことは男性だけでなく女性の指導者であっても同様である。一方でこの女性特有の身体的特性への配慮は、指導者でなくとも、競技者の体調の変化に常に目を光らせ、主たる指導者に助言ができる家族やトレーナーなどの支援スタッフがいれば対応可能な場合もある。

では、女性競技者にとって最も重要な問題点とは何であろうか。

前述したように、一部のスポーツ種目以外のほとんどの女性競技者は男性指導者に指導されている。そのため、女性競技者もまた基本的には「男性社会」のルールに従うことになる。

一般的に「男性社会」にはわが国独特の上下関係が色濃く存在し、いわゆる「タテ社会」といわれている。その根底には、男性は子どもの頃から常に勝ち負けを争う競争場面にさらされていることが理由として挙げられている。このことをスポーツの現場に当てはめると、わが国の指導者と競技者という関係には、そもそもの年齢によって、あるいは師弟関係や組織を統轄する者と従う者といった立場によって、「タテ社会」は成立している。さらにこの場合、指導者はチームの指揮官であることが多く、最も重要な権限のひとつである選手起用に関する決定権を握っているため、その権力はますます大きなものとなる。つまり、監督に従わなければ使ってもらえないということである。また、これが男性指導者と女性競技者の場合には、さらに強固なものとなる。阿江（1999）は、女性競技者は指導者から大きな影響を受ける傾向があり、指導者に対する「依存性」が高いことを指摘している。

本来スポーツにおける指導者の役割は、競技者の技能向上に貢献することである。簡単に言うと、「できるようにさせる」、「うまくする」ということであり、これを実現する能力が指導者には求められるのである。しかし、単に技能向上といっても、指導者が競技者を完全にコントロールした状態で、一見できるよう見せかけているというのは、本来の意味での技能向上とは言えない。スポーツにおける最大の教育的価値は、日々の練習によってスポーツ技能を高めていくプロセスを経て、運動学習能力そのものを獲得していくことだからである。「できる」ようになることは誰にとっても楽しい。自らが興味を持った動き方について、自らの意志で試行錯誤を繰り返し、自らの力で獲得したコツは、かけがえのない宝物になる。また、これらの一連の体験は、日常生活のあらゆる場面での学習活動に応用可能であり、これによってスポーツ以外の場面でも充実した生活を送っていくことができるのである。そして、この体験で得た喜びを他者にも伝えていきたいという思いへとつながり、その思いが競技生活を終えた後の指導者の道へと続いていくのである。つまり、操り人形の如く得た勝利は、競技者から指導者への転身の理由にはならない。

長澤（2000）は、大学生の体育における競争の認識に関して調査を行った結果、競争に対する姿勢には男女差があり、男子学生の方が女子学生よりも積極的に競争に取り組んでいたことを明らかにしている。また、徳永（2000）は、スポーツ選手の心理的競技能力について性差に着目した調査によって、心理的競技能力の総合得点では男性が女性を上回り、とくに男性は作戦能力（判断力、予測力）、自信（自信、決断力）、競技意欲（忍耐力、闘争心、勝利意欲）で優れ、女性は自己実現意欲、協調性でやや優れていることをしている。ただし、そこには個人差があるという。さらに、本間（2009）は、シンクロナイズドスイミングの日本代表選手の心理的競技能力に関する調査によって、シンクロナイズドスイミングの日本代表選手は協調性が顕著に高く、忍耐力と自己実現意欲が高いことを指摘している。また、A代表選手が他の日本代表選手よりも忍耐力と闘争心が高かったことも同時に明らかにしている。すなわち、他者との協調性が不可欠な競技特性は当然のことながら影響していると考えられるが、同時に女性特有の能力ということもでき、さらに競技力が高くなれば男性が有意に持っていると考えられている闘争心も身につけているという。つまり、男性の特徴としては闘争心や競争心が、女性の特徴として協調性や自己実現意欲が挙げられる。だたし、女性の中でもトップアスリートは男性的な特徴を有している者もいるということである。

これを指導者と競技者の関係に当てはめてみると、男性同士の場合も当然主従関係はある。しかし、そもそも男性は競争を好み、また自らで状況判断し物事を進めて行く傾向があるため、主従関係のなかにもどこか男性同士の特徴が示される。決して指導者が全権を握るということはなく、どこかで競技者に委ねる部分がある。そして、委ねられた経験をもつ競技者は、いずれ指導者となりさらにその体験を伝承していくという循環が生まれる。しかし、競技者が女性の場合はこのようにはならない。それはすでに述べたような男性指導者に依存する女性競技者という関係が成立しているからである。ただし、この依存関係は女性から男性への一方通行ではない。男性には強い競争心があるならば、相手よりも常に上位でいたいという支配欲があると考えられる。すなわち、頼りたい女性と頼られたい男性の相互依存という関係が成立する。男性指導者は自らに忠誠を尽くし、自らの思いを実現してくれる対象として女性競技者と関わり、また女性競技者も指導者に忠実に従うことを望み、それによって指導者が得る喜びを自身の喜びと感じるのである。一見、互いによって良いことのように思える。しかし、これではいつま

で経っても競技者は指導者の手から離れることはない。相互依存の関係で育った競技者は、本来の意味での「できる」ようになる楽しみを知ることはなく、競技者としてのキャリアを終えたあとに指導者になろうとは思わない。仮に指導者になっても、指導を継続していくにあたってさまざまな問題が潜む現状を乗り越えてまで、この世界に残ろうとは思わない。ただし、この関係はすべての女性競技者に当てはまるわけではない。また、男性指導者のなかには女性の自立心を育成する指導を行っている指導者もいる。そして、数少ない女性指導者のなかにも、同性であるにも関わらず、女性競技者を支配しようとする指導者もいる。しかし、どのような組み合わせであっても、指導者は競技者を未来の後継者として育成すべきなのは自明のことである。阿江（2013）は学校運動部活動で目指すべきことを考える上で、最終的に教育の目指すべきことは、自分で考え自分で行動できる自主性に溢れた子どもを育成することであり、指導者の責任が重いことを指摘している。これは、学校教育に限ったことではなく、女性の競技者や指導者が抱える問題の解決につながる重要な指摘である。

Ⅳ. まとめ

本論では、女性競技者が抱える問題と女性指導者増加のための方策について、スポーツ現場における指導者および競技者の性別と体罰・暴力に関する実態調査の結果と、筆者の経験に基づいて検討してきた。その結果、女性競技者が抱える問題と女性指導者増加のための方策には大きなつながりがあることが明らかになった。

スポーツの主役は競技者である。そして、その競技者は指導者から多大な影響を受ける。すなわち、指導者がどのように競技者を育成するかが重要なのである。女性のスポーツについては、競技者時代にスポーツの真の面白さを知った女性たちが指導者に転身し、さらにスポーツに興味をもった女性たちにスポーツの醍醐味を伝承していこうと考えたときにはじめて、問題解決の第一歩が踏み出せるのではないだろうか。そして、そこではじめて社会構造の見直しや支援制度の整備が意味を持つのではないだろうか。

以上、本論がスポーツにおける男女共同参画の推進および体罰・暴力撲滅に役立てば幸いである。

【文献】

阿江美恵子（1999）女性競技スポーツの指導者再考（特集女性スポーツの近未来―女性アスリートの自立とその援助）、ヒューマンサイエンス、11（2）：20-25。

阿江美恵子（2000）運動指導者の暴力的行動の影響：社会的影響過程の視点から、体育学研究、45：89-103。

阿江美恵子（2013）学校における体罰問題―部活動の暴力的指導（特集　学校教育における健康と体育）、教育展望、7・8月合併号：27-31。

本間三和子（2009）シンクロナイズドスイミング日本代表選手の心理的競技能力、水泳水中科学、12（1）：1-9。

順天堂大学（2013）文部科学省委託事業「チーム「ニッポン」マルチサポート事業」（女性アスリート戦略強化支援方策の調査研究。

公益財団法人日本体育協会指導者育成専門委員会（2014）学校運動部活動指導者の実態に関する調査。

文部科学省（2011）スポーツ基本法。

文部科学省（2012）スポーツ基本計画。

文部科学省（2013）スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議（タスクフォース）報告書。

内閣府（2012）男性にとっての男女共同参画に関する意識調査。

内閣府（2014）女性の活躍推進に関する世論調査。

長澤光雄（2000）大学生の体育における競争の認識に関する一考察、秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要、22：31-39。

西坂珠美、會田宏（2007）高等学校のクラブ活動における指導者の暴力行為、武庫川女子大学紀要、55：149-157。

徳永幹雄、吉田英治、重枝武司、東健二、稲富勉、斎藤孝（2000）スポーツ選手の心理的競技能力にみられる性差、競技レベル差、種目差、健康科学、22：109-120。

山口香（2013）女性トップアスリートの特徴とセカンドキャリアにおける問題、http://www.shp.taiiku.otsuka.tsukuba.ac.jp/tacs/?page_id=531

スコアールーム①

高松宮記念杯第66回全日本高等学校ハンドボール選手権大会

開催期日：2015年8月1日(土)～8月7日(金)
会　　場：大阪府・堺市金岡公園体育館ほか

【男　子】

▼１回戦

桃山学院（開催地）	30（11－13、15－13）29 （2－1 延長 2－2）	不来方（岩手）
富岡（群馬）	22（10－8、12－11）19	九州学院（熊本）
愛知（愛知）	35（16－6、19－7）13	松山東（愛媛）
明星（東京）	38（20－2、18－8）10	新潟明訓（新潟）
神戸国際大附（兵庫）	31（15－6、16－10）16	境（鳥取）
高岡向陵（富山）	45（21－5、24－7）12	山形中央（山形）
駿台甲府（山梨）	40（19－13、21－15）28	彦根総合（滋賀）
長崎日大（長崎）	33（15－8、18－4）12	県利府（宮城）
総社（岡山）	21（8－5、13－8）13	洛北（京都）
学法石川（福島）	25（14－10、11－13）23	清水東（静岡）
佐賀清和（佐賀）	32（16－13、16－11）24	向原（広島）
香川中央（香川）	28（16－13、12－6）19	県屋代（長野）
博多（福岡）	34（14－10、20－14）24	國學院栃木（栃木）
高山西（岐阜）	32（18－9、14－12）21	高知中央（高知）
小松工業（石川）	38（20－5、18－5）10	青森南（青森）
小林秀峰（宮崎）	46（24－6、22－9）15	飯南（島根）

▼２回戦

北陸（福井）	33（16－13、17－17）30	桃山学院（開催地）
富岡（群馬）	35（14－10、21－12）22	札幌月寒（北海道）
雄城台（大分）	27（13－10、14－13）23	愛知（愛知）
下松工業（山口）	34（16－9、18－14）23	明星（東京）
藤代紫水（茨城）	40（19－11、21－12）23	神戸国際大附（兵庫）
高岡向陵（富山）	38（22－9、16－12）21	国分（鹿児島）
駿台甲府（山梨）	41（17－8、24－7）15	池田（徳島）
長崎日大（長崎）	32（13－11、19－12）23	四日市工業（三重）
興南（沖縄）	29（14－12、15－15）27	総社（岡山）
市川（千葉）	39（19－10、20－17）27	学法石川（福島）
佐賀清和（佐賀）	23（8－10、15－12）22	紀北農芸（和歌山）
法政大二（神奈川）	30（19－16、11－12）28	香川中央（香川）
大体大浪商（大阪）	44（22－13、22－15）28	博多（福岡）
高山西（岐阜）	45（19－12、26－22）34	湯沢（秋田）
小松工業（石川）	36（17－7、19－12）19	橿原（奈良）
浦和学院（埼玉）	39（19－13、20－15）28	小林秀峰（宮崎）

▼３回戦

北陸	39（17－14、22－6）20	富岡
雄城台	27（12－8、15－10）18	下松工業
藤代紫水	33（15－16、18－15）31	高岡向陵
駿台甲府	41（19－10、22－18）28	長崎日大
市川	32（16－15、16－16）31	興南
法政大二	29（13－9、16－8）17	佐賀清和
大体大浪商	29（15－10、14－13）23	高山西
浦和学院	32（14－11、18－14）25	小松工業

▼準々決勝

北陸	29（14－18、15－8）26	雄城台
藤代紫水	39（25－15、14－19）34	駿台甲府
法政大二	35（18－16、17－11）27	市川
浦和学院	32（19－14、13－9）23	大体大浪商

▼準決勝

藤代紫水	33（18－12、15－19）31	北陸
法政大二	38（19－20、15－14）37 （0－1 延長 4－2）	浦和学院

▼決　勝

藤代紫水	39（16－14、23－13）27	法政大二

【女　子】

▼１回戦

高岡向陵（富山）	33（14－6、19－5）11	日大山形（山形）
立命館守山（滋賀）	31（14－15、17－13）28	函館大付（北海道）
不来方（岩手）	17（8－7、9－7）14	飛騨高山（岐阜）
今治東中等教育学校（愛媛）	39（18－1、21－3）4	米子東（鳥取）
福井商業（福井）	29（14－8、15－10）18	和歌山商業（和歌山）
城北（熊本）	32（15－8、17－7）15	清水桜が丘（静岡）
山陽学園山陽（広島）	27（9－10、18－10）20	青森中央（青森）
西南学院（福岡）	37（19－7、18－12）19	長野南（長野）
水海道第二（茨城）	28（12－11、16－12）23	聖和学園（宮城）
佐世保商業（長崎）	24（8－13、16－10）23	神戸星城（兵庫）
昭和学院（千葉）	42（23－6、19－6）12	添上（奈良）
大分（大分）	31（18－12、13－17）29	大曲農業（秋田）
鹿児島南（鹿児島）	26（16－10、10－11）21	四日市商業（三重）
浦和実業学園（埼玉）	23（11－12、12－10）22	宣真（開催地）
大谷（京都）	19（12－12、7－6）18	栃木商業（栃木）
那覇西（沖縄）	41（25－6、16－8）14	江津（島根）

▼２回戦

佼成学園女子（東京）	26（10－8、16－11）19	高岡向陵（富山）
小林秀峰（宮崎）	32（17－10、15－9）19	立命館守山（滋賀）
不来方（岩手）	42（16－8、26－10）18	佐賀清和（佐賀）
富岡東（群馬）	26（13－13、13－11）24	今治東中等教育学校（愛媛）
横浜創英（神奈川）	29（11－10、18－10）20	福井商業（福井）
城北（熊本）	30（12－8、18－3）11	城北（徳島）
日川（山梨）	32（19－6、13－15）21	山陽学園山陽（広島）
四天王寺（大阪）	28（10－4、18－6）10	西南学院（福岡）
高松商業（香川）	28（16－4、12－13）17	水海道第二（茨城）
佐世保商業（長崎）	26（13－4、13－8）12	柏崎（新潟）
高水（山口）	29（16－12、13－14）26	昭和学院（千葉）
名古屋経済大学市邨（愛知）	28（18－8、10－12）20	大分（大分）
玉野光南（岡山）	30（17－10、13－13）23	鹿児島南（鹿児島）
郡山女子大附（福島）	27（15－13、12－11）24	浦和実業学園（埼玉）
大谷（京都）	50（27－4、23－4）8	土佐（高知）
小松市立（石川）	27（13－10、14－12）22	那覇西（沖縄）

▼３回戦

佼成学園女子	33（14－10、19－11）21	小林秀峰
不来方	31（16－16、15－10）26	富岡東
横浜創英	21（14－9、7－11）20	城北
四天王寺	39（22－8、17－7）15	日川
高松商業	25（14－6、11－10）16	佐世保商業
高水	28（14－7、14－10）17	名古屋経済大学市邨
玉野光南	37（22－6、15－10）16	郡山女子大附
小松市立	27（14－4、13－9）13	大谷

▼準々決勝

佼成学園女子	29（13－5、16－9）14	不来方
四天王寺	20（11－5、9－8）13	横浜創英
高松商業	28（16－10、12－10）20	高水
玉野光南	28（17－17、11－8）25	小松市立

▼準決勝

四天王寺	28（12－9、10－13）26 （2－2 延長 4－2）	佼成学園女子
高松商業	22（10－9、12－12）21	玉野光南

▼決　勝

高松商業	17（9－8、8－8）16	四天王寺

スコアールーム②

第28回全国小学生ハンドボール大会

開催期日：2015年7月30日(木)～8月2日(日)
会　　場：京都府・京田辺市田辺中央体育館ほか

【男　子】

▼Ａブロック

東海ＨＢＳ	17（5－1、7－1、5－4）6	土浦ＨＢＣ
東海ＨＢＳ	19（7－1、7－3、5－4）8	メーヴェン釧路ＨＢＣ
メーヴェン釧路ＨＢＣ	19（6－7、8－4、5－2）13	岩出ＨＢ教室
土浦ＨＢＣ	20（9－2、4－2、7－5）9	岩出ＨＢ教室

【順位】①東海ＨＢＳ（愛知）②メーヴェン釧路ＨＢＣ（北海道）③土浦ＨＢＣ（茨城）④岩出ＨＢ教室（和歌山）

▼ Ｂブロック

明石ジュニア　19（8－5、3－3、8－6）14　境港マリンバード
明石ジュニア　19（7－3、6－5、6－7）15　延岡東ＨＢＣ
境港マリンバード　20（9－4、5－2、6－5）11　延岡東ＨＢＣ

【順位】①明石ジュニア（兵庫）②境港マリンバード（鳥取）③延岡東ＨＢＣ（宮崎）

▼ Ｃブロック

大浜キッズ　13（3－5、4－3、6－3）11　能美ジュニアHBC
下郡HBスポ少　24（7－5、9－5、8－6）16　富岡イーグルス
下郡HBスポ少　20（3－4、10－3、7－6）13　大浜キッズ
富岡イーグルス　18（5－2、2－5、11－3）10　能美ジュニアHBC

【順位】①下郡ＨＢスポ少（大分）②大浜キッズ（大阪）③富岡イーグルス（群馬）④能美ジュニアＨＢＣ（石川）

▼ Ｄブロック

小島小ＨＢＣ　12（1－1、2－2、6－6）11　高知ＪＨＣ
（3－2）
松井ヶ丘小HBC　19（6－5、4－4、9－5）14　ＨＣ市川
松井ヶ丘小HBC　16（4－1、6－2、6－3）6　小島小ＨＢＣ
ＨＣ市川　23（5－4、11－5、7－3）12　高知ＪＨＣ

【順位】①松井ヶ丘小ＨＢＣ（開催地）②小島小ＨＢＣ（長崎）③ＨＣ市川（千葉）④高知ＪＨＣ（高知）

▼ Ｅブロック

安芸高田HBC　31（8－2、13－0、10－2）4　Jr. レイカーズ
玉名町小学校　23（7－1、6－2、10－6）9　横浜ＨＢＣ
玉名町小学校　24（8－10、7－6、9－7）23　安芸高田HBC
横浜ＨＢＣ　21（9－5、5－0、7－1）6　Jr. レイカーズ

【順位】①玉名町小学校（熊本）②安芸高田ＨＢＣ（広島）③横浜ＨＢＣ（神奈川）④Ｊｒ．レイカーズ（滋賀）

▼ Ｆブロック

桃園ＨＢＣ　24（4－4、6－3、14－0）7　東根HBスポ少
かすやブルーガッツ　23（9－2、8－5、6－7）14　東久留米HBC
かすやブルーガッツ　16（6－4、6－6、4－4）14　桃園ＨＢＣ
東根HBスポ少　12（4－1、4－3、4－4）8　東久留米HBC

【順位】①かすやブルーガッツ（福岡）②桃園ＨＢＣ（京都）③東根ＨＢスポ少（山形）④東久留米ＨＢＣ（東京）

▼ Ｇブロック

神森小ＨＢＣ　18（5－1、10－2、3－8）11　綾川ジュニアHBC
高山ミニHBC　14（4－3、5－4、5－3）10　川口ＨＢＣ
神森小ＨＢＣ　22（8－2、8－2、6－8）12　高山ミニHBC
川口ＨＢＣ　13（6－3、4－5、3－4）12　綾川ジュニアHBC

【順位】①神森小ＨＢＣ（沖縄）②高山ミニＨＢＣ（岐阜）③川口ＨＢＣ（埼玉）④綾川ジュニアＨＢＣ（香川）

▼ Ｈブロック

上庄ＨＢＣ　27（13－1、8－2、6－2）5　愛媛ジュニアーズ
上庄ＨＢＣ　23（5－2、12－4、6－2）8　羽津HB少年団
愛媛ジュニアーズ　18（4－4、9－7、5－6）17　羽津HB少年団

【順位】①上庄ＨＢＣ（富山）②愛媛ジュニアーズ（愛媛）③羽津ＨＢ少年団（三重）

▼ Ｉブロック

霧島ジュニアHBC　13（3－0、3－4、7－1）5　総社クラブジュニア
霧島ジュニアHBC　25（7－3、10－1、8－1）5　大宮南小ＨＢ
総社クラブジュニア　22（6－4、7－3、9－3）10　大宮南小ＨＢ

【順位】①霧島ジュニアＨＢＣ（鹿児島）②総社クラブジュニア（岡山）③大宮南小ＨＢ（栃木）

▼ Ｊブロック

北陸電力ジュニアブルーロケッツ　23（12－0、9－4、2－7）11　真弓クラブ
IDBスポーツクラブ　26（11－4、8－7、7－6）17　山梨市ＨＢスポ少
北陸電力ジュニアブルーロケッツ　20（5－7、8－7、7－4）18　IDBスポーツクラブ
山梨市ＨＢスポ少　20（5－0、8－4、7－3）7　真弓クラブ（奈良）

【順位】①北陸電力ジュニアブルーロケッツ（福井）②ＩＤＢスポーツクラブ（山口）③山梨市ＨＢスポ少（山梨）④真弓クラブ（奈良）

▼ 決勝トーナメント１回戦

下郡HBスポ少　13（4－1、4－3、5－5）9　明石ジュニア
上庄ＨＢＣ　19（5－5、7－3、7－8）16　霧島ジュニアHBC

▼ 準々決勝

東海ＨＢＳ　24（4－1、9－1、11－4）6　下郡HBスポ少
玉名町小学校　17（8－4、5－4、4－4）12　松井ヶ丘小HBC
神森小ＨＢＣ　29（9－5、8－5、12－6）16　かすやブルーガッツ
上庄ＨＢＣ　25（4－3、8－4、13－2）9　北陸電力ジュニアブルーロケッツ

▼ 準決勝

東海ＨＢＳ　23（3－3、10－4、10－4）11　玉名町小学校
神森小ＨＢＣ　20（3－4、8－4、9－6）14　上庄ＨＢＣ

▼ ３位決定戦

上庄ＨＢＣ　31（8－5、12－6、11－4）15　玉名町小学校

▼ 決　勝

神森小ＨＢＣ　28（5－5、12－7、11－3）15　東海ＨＢＳ

【女　子】

▼ 女子ａブロック

浦城小ＨＢＣ　15（6－1、3－3、6－4）8　北陸電力ジュニアブルーロケッツ
東海ＨＢＳ　19（9－3、6－1、4－1）5　日吉台バード
東海ＨＢＳ　16（4－5、5－5、7－4）14　城小ＨＢＣ
北陸電力ジュニアブルーロケッツ　16（5－4、7－2、4－1）7　日吉台バード

【順位】①東海ＨＢＳ（愛知）②浦城小ＨＢＣ（沖縄）③北陸電力ジュニアブルーロケッツ（福井）④日吉台バード（千葉）

▼ 女子ｂブロック

三佐HBCスポ少　16（7－1、6－1、3－2）4　富岡ラビッツ
三佐HBCスポ少　19（11－0、5－1、3－2）3　岩出ＨＢ教室
富岡ラビッツ　11（2－1、5－1、4－2）4　岩出ＨＢ教室

【順位】①三佐ＨＢＣスポ少（大分）②富岡ラビッツ（群馬）③岩出ＨＢ教室（和歌山）

▼ 女子ｃブロック

鈴鹿ＨＢＳ　16（3－5、7－5、6－3）13　塩山HBスポ少
小島小ＨＢＣ　11（3－4、2－0、6－2）6　総社クラブジュニア
小島小ＨＢＣ　23（8－3、8－4、7－5）12　鈴鹿ＨＢＳ
総社クラブジュニア　16（6－3、6－4、4－7）14　塩山HBスポ少

【順位】①小島小ＨＢＣ（長崎）②鈴鹿ＨＢＳ（三重）③総社クラブジュニア（岡山）④塩山ＨＢスポ少（山梨）

▼ 女子ｄブロック

貝塚バーディーズ　13（5－0、4－4、4－5）9　塩江HBCスポ少
小松ジュニアHBC　31（8－2、9－0、14－2）4　堺港マリンバード
貝塚バーディーズ　9（2－0、2－0、5－4）4　小松ジュニアHBC
塩江HBCスポ少　24（9－1、6－1、9－0）2　堺港マリンバード

【順位】①貝塚バーディーズ（大阪）②小松ジュニアＨＢＣ（石川）③塩江ＨＢＣスポ少（香川）④堺港マリンバード（鳥取）

▼女子eブロック

草内小HBC 21（6－1、7－4、8－0）5 愛媛ジュニアーズ
麻生フェニックスJr 13（6－4、2－4、5－3）11 HC春吉Jr
草内小HBC 12（3－2、4－3、5－2）7 麻生フェニックスJr
HC春吉Jr 16（6－2、4－6、6－3）11 愛媛ジュニアーズ

【順位】①草内小HBC（京都）②麻生フェニックスJr（茨城）③HC春吉Jr（福岡）④愛媛ジュニアーズ（愛媛）

▼女子fブロック

真弓クラブ 15（3－5、8－0、4－2）7 多摩HBC
霧島ジュニアHBC 27（8－1、8－2、11－2）5 安芸高田HBC
霧島ジュニアHBC 14（4－4、1－0、9－2）6 真弓クラブ
多摩HBC 20（8－3、6－7、6－4）14 安芸高田HBC

【順位】①霧島ジュニアHBC（鹿児島）②真弓クラブ（奈良）③多摩HBC（東京）④安芸高田HBC（広島）

▼女子gブロック

三郷HBC 16（3－3、6－6、7－2）11 IDBスポーツクラブ
宇土小学校 23（8－2、9－3、6－1）6 笠松HBスポ少
三郷HBC 17（9－3、5－2、3－3）8 宇土小学校
IDBスポーツクラブ 14（2－3、5－1、7－2）7 笠松HBスポ少

【順位】①三郷HBC（埼玉）②宇土小学校（熊本）③IDBスポーツクラブ（山口）④笠松HBスポ少（岐阜）

▼女子hブロック

メーヴェン釧路HBC 19（6－1、7－5、6－4）10 日知屋東小HB部
薪小HBC 22（9－1、9－2、4－1）4 大宮南小HB部
薪小HBC 19（7－2、8－4、4－3）9 メーヴェン釧路HBC
日知屋東小HB部 26（9－4、11－4、6－8）16 大宮南小HB部

【順位】①薪小HBC（開催地）②メーヴェン釧路HBC（北海道）③日知屋東小HB部（宮崎）④大宮南小HB部（栃木）

▼女子iブロック

HC宮田 16（2－4、5－3、9－3）10 きさきネクサスHC
高知JHC 12（4－3、3－1、5－3）7 生田HCボンバーズ
HC宮田 22（8－2、9－1、5－4）7 高知JHC
きさきネクサスHC 27（10－0、6－5、11－2）7 生田HCボンバーズ

【順位】①HC宮田（富山）②高知JHC（高知）③きさきネクサスHC（兵庫）④生田HCボンバーズ（神奈川）

▼決勝トーナメント1回戦

小島小HBC 12（4－2、4－4、4－4）10 三佐HBCスポ少

▼準々決勝

東海HBS 11（5－3、2－2、4－2）7 小島小HBC
草内小HBC 12（4－3、2－3、6－4）10 貝塚バーディーズ
三郷HBC 13（5－3、5－3、3－3）9 霧島ジュニアHBC
HC宮田 16（4－4、7－3、5－3）10 薪小HBC

▼準決勝

東海HBS 13（4－4、4－1、5－2）7 草内小HBC
三郷HBC 15（7－2、4－5、4－6）13 HC宮田

▼3位決定戦

HC宮田 21（6－7、5－4、5－5）19 草内小HBC
（3－2延長2－1）

▼決勝

三郷HBC 12（5－2、4－3、3－2）7 東海HBS

スコアールーム③

第23回全日本マスターズハンドボール大会

開催期日：2015年7月31日（金）～8月2日（日）
会　　場：愛知県・豊田市総合育館（スカイホール）ほか

【男子交流型】

▼あグループ

岐阜MHC 16－3 HC名古屋ATF・A
岐阜MHC 19－13 神楽坂シニア
岐阜MHC 16－9 秋桜柏
秋桜柏 11－5 HC名古屋ATF・A
神楽坂シニア 12－10 秋桜柏
HC名古屋ATF・A 12－9 神楽坂シニア

▼いグループ

兵庫選抜HC 12－6 HCみやびマスターズ
兵庫選抜 18－11 LBCアルバトロス
兵庫選抜 14－4 海自桜錨海B
HCみやびマスターズ 14－7 LBCアルバトロス
HCみやびマスターズ 17－7 海自桜錨海B
LBCアルバトロス 14－11 海自桜錨海B

▼うグループ

三景OB 17－4 海自桜錨会A
三景OB 16－13 46G会
三景OB 18－7 豊橋マスターズ
海自桜錨会A 11－9 46G会
海自桜錨会A 17－16 豊橋マスターズ
46G会 24－5 豊橋マスターズ

▼えグループ

徳山クラブマスターズ 11－7 葵クラブ
徳山クラブマスターズ 10－9 待兼シニア
徳山クラブマスターズ 13－9 知多クラブ
葵クラブ 8－8 待兼シニア
葵クラブ 16－8 知多クラブ
待兼シニア 13－9 知多クラブ

▼おグループ

横浜平沼マスターズ 17－9 摂津倶楽部－A
横浜平沼マスターズ 20－11 松門会
神楽坂フェニックス 21－3 摂津倶楽部－A
神楽坂フェニックス 18－9 横浜平沼マスターズ
松門会 11－4 摂津倶楽部－A
松門会 28－24 神楽坂フェニックス

▼かグループ

オールド愛媛 17－13 小金クラブ
小金クラブ 15－8 HC名古屋ATF・B
小金クラブ 17－10 U－60スペイン選抜
U－60スペイン選抜 19－11 HC名古屋ATF・B
U－60スペイン選抜 11－10 オールド愛媛

HC名古屋ATF・B	13－9	オールド愛媛

▼きグループ

蔵前如水会	8－7	川崎ハンドボールマスターズクラブ
蔵前如水会	9－5	尾北ハンドボールクラブ（BHC）
オークスクラブ	11－9	尾北ハンドボールクラブ（BHC）
オークスクラブ	19－17	蔵前如水会
尾北ハンドボールクラブ（BHC）	12－9	川崎ハンドボールマスターズクラブ
川崎ハンドボールマスターズクラブ	14－12	オークスクラブ

▼くグループ

中京オールスターズ	15－8	天王寺高校マスターズ
中京オールスターズ	18－6	北陵シャイナーズ
中京オールスターズ	16－9	TeamNEXT
天王寺高校マスターズ	9－6	TeamNEXT
天王寺高校マスターズ	21－6	北陵シャイナーズ
TeamNEXT	12－11	北陵シャイナーズ

▼けグループ

讃岐マスターズ	16－8	46G's会
讃岐マスターズ	14－11	ガンバ花クラ・東京社会人連盟
讃岐マスターズ	20－6	駒沢クラブ
46G's会	18－14	ガンバ花クラ・東京社会人連盟
46G's会	14－4	駒沢クラブ
ガンバ花クラ・東京社会人連盟	9－5	駒沢クラブ

【女子交流型】

▼さグループ

マミーズ	13－2	摂津倶楽部・K
マミーズ	14－7	HC名古屋／中部ドリームズ
マミーズ	15－2	プリティーマスターズ（F・J・C）
摂津倶楽部・K	4－3	HC名古屋／中部ドリームズ
摂津倶楽部・K	10－5	プリティーマスターズ（F・J・C）
HC名古屋／中部ドリームズ	19－5	プリティーマスターズ（F・J・C）

▼しグループ

樫さんクラブ	12－8	モッピークラブ
樫さんクラブ	17－10	ハミングバード
樫さんクラブ	8－4	瀬戸内レディース
モッピークラブ	18－11	ハミングバード
モッピークラブ	16－6	瀬戸内レディース
ハミングバード	16－10	瀬戸内レディース

▼すグループ

MMCM	16－3	武蔵野クラブ
MMCM	13－6	台北女子手球隊
MMCM	16－3	BABAR'S
台北女子手球隊	13－7	武蔵野クラブ
台北女子手球隊	7－7	BABAR'S
武蔵野クラブ	10－5	BABAR'S

▼せグループ

徳山クラブANE	11－9	風見鶏ファミリー
徳山クラブANE	15－6	生駒オークスレディース
徳山クラブANE	17－11	フェニーチェ
風見鶏ファミリー	15－6	スマイルGIFU
風見鶏ファミリー	14－7	生駒オークスレディース
生駒オークスレディース	13－6	スマイルGIFU
フェニーチェ	11－5	スマイルGIFU

【男子順位決定型】

〈青グループ〉

▼1回戦

西笹川クラブ	20－11	静岡マスターズ
拝島ブルーウッド	11－9	白石クラブマスターズ

▼2回戦

Tab Club	15－11	安威川クラブ
GG'S	14－10	蒲郡クラブ
下松クラブアダルツ	19－11	西笹川クラブ
拝島ブルーウッド	13－11	オールドフェイス

▼準決勝

下松クラブアダルツ	17－13	Tab Club
GG'S	15－8	拝島ブルーウッド

▼3位決定戦

Tab Club	19－10	拝島ブルーウッド

▼決勝

下松クラブアダルツ	12－10	GG'S

〈赤グループ〉

▼1回戦

Golden Age	18－9	信州ノーウェーブ
大阪330HC	14－6	金津クラブGOD

▼2回戦

小松オールウェイズ	12－8	HC群馬サファリ
G・G北海道	19－8	SevenSters
Golden Age	13－9	GHBPARES
大阪330HC	23－10	蔵前如水会T

▼準決勝

小松オールウェイズ	12－12	Golden Age
大阪330HC	16－9	G・G北海道

▼3位決定戦

Golden Age	18－14	G・G北海道

▼決　勝

大阪330HC	15－9	小松オールウェイズ

【女子順位型】

〈黄グループ〉

御座姐	22－4	かよちゃんず
御座姐	12－9	Gabbiano☆DX
かよちゃんず	15－8	Gabbiano☆DX

〈桃グループ〉

MLN39	14－10	富山エンジェルス
NEWフェイス	14－12	あじこめさくら。
MLN39	18－11	NEWフェイス
富山エンジェルス	14－10	あじこめさくら。

▼7－8位決定戦

あじこめさくら。	15－10	フェニーチェ

▼5－6位決定戦

Gabbiano☆DX	10－10	NEWフェイス

▼3位決定戦

富山エンジェルス	18－4	かよちゃんず

▼決　勝

MLN39	15－8	御座姐

▶日本ハンドボール協会機関誌「ハンドボール」回覧簿◀

全国のクラブ・部活動でハンドボールをプレーしている皆さん！　日本ハンドボール協会機関誌「ハンドボール」（本誌）をぜひ仲間と共に読んでみてください。代表監督・選手のコメント、各種大会の結果報告、海外情報など、きっと皆さんのハンドボールライフに役に立つ情報が掲載されているはずです！

閲覧者	1	2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24	25	26

がんばれハンドボール20万人会「サポート会員」8月入会・継続会員

【宮城】小林宏幸、川久保敦、大河原浩気【福島】石口開人、阿部翔平、板橋智哉、橋本隆祐、阿部史弥、木目沢誠仁、鈴木裕規【埼玉】岡部克則、西山逸成【千葉】黒田俊雄【東京】上西啓之、小泉美智子【山梨】栗原富貴子【愛知】加藤ゆき、笹野邦雄【三重】加藤　祥【岐阜】中島明美【大阪】望月滋乃、舟崎智芳、久保幸子、白鳥貴子【兵庫】高祖加奈子、柿木國夫、【広島】両徳良樹【佐賀】久保田秀光【熊本】葦原大三、井本光次郎

【10月の行事予定】

【会議】……………………………………………………………

10月10日(土)　本部長会議

【大会】……………………………………………………………

10月20日(火)～25日(日)

リオデジャネイロ・オリンピック競技女子アジア予選

……………………………………（愛知県・名古屋市）

HAND BALL CONTENTS Oct.





(公財)日本ハンドボール協会編 『ハンドボール』 第五五四号

平成二十七年九月二十六日印刷
平成二十七年十月一日発行

東京都渋谷区神南一―一―一
電話 代表〇三―三四八一―二三六一
振替 〇〇一二〇―七―一〇二九三

編集兼発行人 川上憲太

定価 年間三三〇〇円